

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 36 集

う ち は ら い せ き
内 原 遺 跡

障害者支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

令和3年12月

常陸大宮市教育委員会

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し、県都水戸から約20kmの、平成の大合併で誕生した人口約3万9千人の市です。

市域は、鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川、南西部には那珂川、中央部には緒川や玉川の清流が流れ、豊富な資源を持つ山林や美しい里山が育まれています。また、河川の流域の低地や台地上には肥沃な田畑が広がり、大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は、有史以前から人々の生活の場となり、現在に至るまで連続と歴史が重ねられてきました。そのため市域には、各時代の集落跡をはじめ、古墳・城館跡・塚などの多くの遺跡が存在しているのです。

これらの地中に残された埋蔵文化財は、私たちの祖先がどのように生活したのか、そして現在の豊かな生活の礎がいかにか築かれてきたのかを知る手がかりになります。このような貴重な文化遺産は、郷土教育に非常に重要なものであり、本書のような発掘調査の情報や研究成果は確実に記録し、未来に伝えていかなくてはなりません。

このたび発掘調査が行われた「内原遺跡」は、那珂川大橋から坂を上った台地の上にあります。河川交通等の要衝であり景観も良く、住みやすい平地が広がっているため、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代といった複数の時代にわたって多くの遺跡が営まれてきました。

今回の調査は、障害者支援施設建設工事に伴い令和2年11月2日から令和3年1月23日まで関東文化財振興会株式会社に委託して実施され、古墳時代の竪穴建物跡や平安時代の竪穴建物跡等が発見されました。特に弥生時代終末期の十王台式土器を伴う古墳時代前期の竪穴建物跡が見つかっており、弥生時代から古墳時代にかけての転換期の研究に資する調査となりました。

本書は、こうした発掘調査の成果を報告するものです。歴史研究の学術資料としてはもとより、地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また、この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり多大なるご理解・ご協力をいただきました社会福祉法人仁川会 理事長 川又幸夫様、ご指導いただきました茨城県教育庁文化課、全般にわたりご協力いただきました地元の皆様、適正かつ慎重な調査をしていただいた関東文化財振興会株式会社様、その他ご指導・ご協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

令和3年12月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長 茅根 正憲

例 言

- 1 本書は、社会福祉法人仁川会障害者支援施設建設工事に伴い発掘調査を実施した茨城県常陸大宮市野口字内原 1279 番 1 ほかの所在する内原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、常陸大宮市教育委員会による試掘確認調査に基づいて、常陸大宮市教育委員会の指導の下、社会福祉法人仁川会から業務委託を受けた関東文化財振興会株式会社が実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業は、社会福祉法人仁川会から業務委託を受けた関東文化財振興会株式会社が、常陸大宮市教育委員会の指導のもとに実施した。

遺跡所在地 茨城県常陸大宮市野口字内原 1279 番 1 外

調査面積 1,479㎡

調査期間 令和2年11月2日～令和3年1月23日

整理期間 令和3年1月26日より令和3年12月20日

調査指導 吹野富美夫・萩野谷悟（常陸大宮市教育委員会）

調査担当 畔津宏幸・杉原宗久（関東文化財振興会株式会社）

- 4 本書の執筆は、第1章第1節を吹野富美夫が、第1章第2節～第4章までを常陸大宮市教育委員会の指導を受け杉原宗久が担当した。
- 5 本書の編集は、杉原が担当した。
- 6 調査及び本報告書の作成にあたり、次の諸機関から御指導・御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）
- 7 本調査における出土遺物・実測図及び写真等は、常陸大宮市教育委員会が保管している。
- 8 調査参加者（五十音順・敬称略）

（発掘調査）阿部武男 宇留野広大 宇留野初男 金沢信好 川崎剛史 軍司徹 今野春雄 今野美登里

坂場光雄 清水昊 菅谷末吉 鈴木めぐみ 谷川明正 飛田けい子 三浦睦子

（整理作業）大越慶子 川又恵美子 後藤栄子 鈴木みどり 田尻悦子 益子光江

凡 例

- 1 本書に記してある座標値は、世界測地系第IX系を用いている。方位は、座標北を示す。
- 2 グリッドについては、5m 間隔で設定した。
- 3 本文中の色調表現は、『新版標準土色帖』2008 年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所指色票監修）を用いた。
- 4 標高は、海拔標高である。
- 5 掲載した図面の基本縮尺は、以下のとおりである。

遺構図 調査区全体図 1/500 竪穴建物跡…1/60

その他遺構…1/30, 1/60

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールによってその縮尺率を表した。

遺物図 土器・土製品・石器・石製品…1/3 を原則とする。ただし種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで示した。

- 6 遺物写真は、原則として実測図の縮尺に合わせて掲載した。
- 7 遺構・遺物実測図中のスクリーンパターン及び記号は、以下に示すとおりである。



- 8 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。

SI：竪穴建物跡 SX：性格不明遺構 SK：土坑 P：ピット

TP：テストピット K：攪乱

- 9 遺物観察表の法量単位はcmである。法量に付した〔 〕は復元値、() は残存値を示す。また、備考欄には残存率・新旧関係等を示す。
- 10 本遺跡の略号は、NUH である。遺物の注記もこれに従っている。

目 次

ごあいさつ

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 古墳時代	9
(1) 竪穴建物跡	9
(2) ビット	47
2 平安時代	48
(1) 竪穴建物跡	48
3 中世	52
(1) 性格不明遺構	52
4 時期不明遺構	54
(1) 土坑	54
(2) ビット	54
5 遺構外出土遺物	55
第4節 総 括	57
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図(1/4,000).....	2
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡(国土地理院 地理院地図電子国土WEB3 万分の1より作成).....	6
第3図	基本土層図(1/40).....	7
第4図	遺構全体図・グリッド設定図(1/500).....	8
第5図	第2号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	10
第6図	第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	11
第7図	第3号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	13
第8図	第3号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	14
第9図	第4号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	16
第10図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図①(1/3).....	17
第11図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図②(1/3).....	18
第12図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図③(1/3).....	19
第13図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図④(1/3).....	20
第14図	第4号竪穴建物跡出土遺物実測図⑤(1/4).....	21
第15図	第5号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60)・出土遺物実測図(1/3).....	26
第16図	第6号竪穴建物跡実測図(1/60).....	28
第17図	第6号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	29
第18図	第7号竪穴建物跡実測図(1/60).....	30
第19図	第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	31
第20図	第8号竪穴建物跡実測図(1/60).....	32
第21図	第8号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	33
第22図	第9号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	35
第23図	第9号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	36
第24図	第10号竪穴建物跡実測図(1/60).....	38
第25図	第10号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	39
第26図	第11号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	41
第27図	第11号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	42
第28図	第12号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	44
第29図	第12号竪穴建物跡出土遺物実測図①(1/3).....	45
第30図	第12号竪穴建物跡出土遺物実測図②(1/3).....	46
第31図	古墳時代のビット実測図(1/60).....	48
第32図	第1号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60).....	50
第33図	第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3).....	51
第34図	第1号性格不明遺構出土遺物実測図(1/3).....	52
第35図	第1号性格不明遺構実測図(1/60).....	53
第36図	第13号ビット出土遺物実測図(1/3).....	54
第37図	時期不明の土坑・ビット実測図(1/60).....	55
第38図	遺構外出土遺物実測図(1/3).....	56
第39図	古墳時代集落の変遷(1/600).....	58

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧	5
表 2	第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表	11
表 3	第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表	15
表 4	第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表①	22
表 5	第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表②	23
表 6	第 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表③	24
表 7	第 5 号竪穴建物跡出土遺物観察表	27
表 8	第 6 号竪穴建物跡出土遺物観察表	29
表 9	第 7 号竪穴建物跡出土遺物観察表	31
表 10	第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表	33
表 11	第 9 号竪穴建物跡出土遺物観察表	36
表 12	第 10 号竪穴建物跡出土遺物観察表	40
表 13	第 11 号竪穴建物跡出土遺物観察表	42
表 14	第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表	47
表 15	古墳時代前期以前のビット	48
表 16	第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表①	49
表 17	第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表②	51
表 18	第 1 号性格不明遺構出土遺物観察表	52
表 19	時期不明の土坑	54
表 20	第 13 号ビット出土遺物観察表	54
表 21	時期不明のビット	54
表 22	遺構外出土遺物観察表	56

写 真 目 次

PL1	調査区遠景 (東から) 遺跡全景 (東から)	PL7	第2号竪穴建物跡出土遺物 1～7 第3号竪穴建物跡出土遺物 1～9
PL2	1区全景 (東から) 2区全景 (東から)	PL8	第3号竪穴建物跡出土遺物 10～17 第4号竪穴建物跡出土遺物 1～4
PL3	第2号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第2号竪穴建物跡 床面出土状況及び遺物出土状況 第2号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況 (南より) 第3号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第3号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より) 第3号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況 (西より) 第4号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第4号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より)	PL9	第4号竪穴建物跡出土遺物 5～17
PL4	第4号竪穴建物跡 遺物出土状況 (西より) 第4号竪穴建物跡 遺物出土状況 (西より) 第4号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況 (北より) 第4号竪穴建物跡 炉跡完掘状況 (南より) 第5号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第6号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第6号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より) 第6号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より)	PL10	第4号竪穴建物跡出土遺物 18～26
PL5	第6号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況 (南より) 第7号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第7号竪穴建物跡 遺物出土状況 (西より) 第8号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第9号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第10号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より) 第11号竪穴建物跡 完掘状況 (西より) 第12号竪穴建物跡 完掘状況 (北より)	PL11	第4号竪穴建物跡 27～39
PL6	第12号竪穴建物跡 完掘状況 (北より) 第12号竪穴建物跡 遺物出土状況 (西より) 第1号竪穴建物跡 遺物出土状況 (南より) 第1号竪穴建物跡 完掘状況 (南より) 第1号性格不明遺構 完掘状況 (西より) 第1号性格不明遺構 遺物出土状況 (西より) 第1号性格不明遺構 遺物出土状況 (北より) テストピット基本層序 (西より)	PL12	第4号竪穴建物跡出土遺物 40～51
		PL13	第4号竪穴建物跡出土遺物 52～57 第5号竪穴建物跡出土遺物 1～5 第6号竪穴建物跡出土遺物 1～4
		PL14	第6号竪穴建物跡出土遺物 5～8 第7号竪穴建物跡出土遺物 1～3 第8号竪穴建物跡出土遺物 1～7
		PL15	第8号竪穴建物跡出土遺物 8 第9号竪穴建物跡出土遺物 1～10 第10号竪穴建物跡出土遺物 1～4
		PL16	第10号竪穴建物跡 5～18
		PL17	第11号竪穴建物跡出土遺物 1・2 第12号竪穴建物跡出土遺物 1～8
		PL18	第12号竪穴建物跡出土遺物 9～16
		PL19	第1号竪穴建物跡出土遺物 1～12
		PL20	第1号性格不明遺構出土遺物 1～7 第13号ピット出土遺物 1 遺構外出土遺物 1～11

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、障害者支援施設建設工事に伴う事前調査である。

令和2年3月27日、社会福祉法人仁川会理事長川又幸夫から常陸大宮市教育委員会に同工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会がなされた。同工事予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内原遺跡地内であるため、同日付で文化財保護法第93条第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けた。

令和2年5月20日、21日、25日の3日間にわたり常陸大宮市教育委員会は試掘調査を実施した。試掘調査はトレンチ方式で行い、調査の結果、古墳時代前期及び平安時代の竪穴建物等が確認され、古墳時代前期及び平安時代の集落跡が存在することが判明した。試掘調査の結果により社会福祉法人仁川会と常陸大宮市教育委員会が協議を行ったところ、障害者支援施設建設工事の必要性により計画変更が困難なことから、工事着手前に記録保存のための発掘調査を実施することの合意が得られた。埋蔵文化財発掘の届出については、その協議結果に基づいて常陸大宮市教育委員会から茨城県教育委員会へ進達した。

令和2年7月14日、茨城県教育委員会から発掘調査を実施する旨の通知を受けた。

発掘調査については、この通知を受けて、社会福祉法人仁川会と常陸大宮市教育委員会の協議により民間発掘調査組織に委託することになり、関東文化財振興会株式会社を選定された。社会福祉法人仁川会、常陸大宮市教育委員会及び関東文化財振興会株式会社は、令和2年9月23日付で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結し、関東文化財振興会株式会社が令和2年11月2日から令和3年1月23日まで本発掘調査を実施した。

(吹野)

第2節 調査の経過

令和2年11月2日より、現地確認、近隣住民への挨拶、道具等搬入、駐車場造成のための砕石搬入・敷均し等の準備作業、およびネット張り等の安全対策を行った。重機による表土除去は11月10日より開始し、同12月12日に終了した。11月16日より人力による遺構検出作業を開始し、合わせてグリッドを設定した。遺構の分布確認後、遺構の掘削・記録作成作業を進めた。12月22日には、常陸大宮市立御前山小学校6年生による遺跡見学があった。令和3年1月13日には現地説明会を開催する予定であったが、前年12月末に常陸大宮市内で新型コロナウイルス感染者が確認されたため、中止となった。1月15日に空からの写真撮影を行い、1月18日より同20日まで竪穴建物跡掘方の確認等の補足調査を行った。埋め戻しは1月21日より開始し、同22日に完了した。翌23日に重機の搬入、ネットの撤去を行い、調査の全工程が終了した。

整理作業は令和3年1月26日より令和3年12月20日までの約11カ月にわたって実施した。初めに出土遺物の洗浄・注記・接合、遺構図面や撮影画像の整理等を行った。その後、遺物の実測やトレース、遺物の写真撮影、原稿執筆、図版作成などの作業を経て、報告書・図面・遺物・台帳類を常陸大宮市教育委員会に返還し、整理作業の全工程が終了した。



第1図 遺跡位置図 (1/4,000)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

内原遺跡は、茨城県常陸大宮市野口字内原 1279 番 1 ほかに所在する。

常陸大宮市は県の北西部に位置し、平成 16 年に、旧大宮町、旧山方町、旧美和村、旧緒川村、旧御前山村の合併により発足した市である。市は、北は大子町、東は常陸太田市、南は那珂市・城里町、西は栃木県那珂川町・那須烏山市・茂木町と接している。当遺跡は、旧御前山村に所在する。

地域の地形は、市域北部に尺丈山(511m)を最高峰とする八溝山地系の鷲子山塊が連なり、その南方に標高 200m 前後の瓜連丘陵が延びている。市域南部は標高 15～30m の沖積地となっており、全体として北高南低の様相を呈する。

市域を流れる主要河川は、市の東を南流する久慈川と市の西を南東に流れる那珂川がある。この両水系には河岸段丘が発達し、下流には若干の低地も認められる。また、市の中央部には緒川・玉川が南流する。緒川は、常陸大宮市野口で那珂川に合流し、合流地点では那珂川と緒川による複合扇状地が見られる。

当遺跡は、那珂川左岸の河岸段丘上に位置する。遺跡は台地の平坦面に立地し、調査区の最高地点の標高は 59m である。遺跡の北側には標高 90m 程度の丘陵があり、台地南側を流れる那珂川との比高は約 40m である。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡として、梶巾遺跡、上坪遺跡、鷹巣戸内遺跡、山方遺跡、大倉遺跡、赤岩遺跡等が知られている。旧大宮町域に所在する赤岩遺跡では、石器・剥片集中地点 3ヶ所と礫群 3ヶ所が検出され、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、搔器、彫器等が出土している。また、三美中道遺跡では石器・剥片集中地点 1ヶ所が確認されている。

縄文時代

縄文時代早期の遺跡としては、中崎遺跡で三戸式期の竪穴建物跡 1棟が、また岡原遺跡で田戸下層式期の竪穴建物跡 1棟が検出されている。前期では、赤岩遺跡で黒浜式期の竪穴建物跡 1棟が、また中崎遺跡で黒浜式期の竪穴建物 3棟、浮島式期の竪穴建物 1棟などが確認されている。中期に入ると遺跡数は増加し、梶巾遺跡、坪井上遺跡、高ノ倉遺跡等が知られている。旧御前山村域の近年の調査では、西崎遺跡で竪穴建物跡 1棟と有段竪穴建物跡 4棟、土坑 378基が確認されており、赤岩遺跡では縄文時代中期の土坑 91基が検出され、三美中道遺跡では、2度の調査により有段竪穴遺構 4棟と土坑 33基、焼土集中部 1ヶ所が確認されている。赤岩遺跡、三美中道遺跡に近接する滝ノ上遺跡では 4次にわたり調査が行われ、竪穴建物跡 71棟、土坑 675基、土器埋設遺構 1基、焼土集中部 2ヶ所等が確認されており、縄文時代中期の大規模集落が那珂川左岸の段丘上に広がっていたことが伺える。

弥生時代

市域の弥生時代の調査例は少ないが、弥生時代中期の小野天神前遺跡で再葬墓が検出され、人面付壺形土器の出土が知られている。同じく中期の泉坂下遺跡では再葬墓から国内最大の人面付壺形土器が出土しており、遺跡は国史跡に指定されている。弥生時代後期の集落遺跡としては、富士山遺跡、梶巾遺跡等が知られている。近隣の遺跡では、山根遺跡で十三台式期の竪穴建物跡 1棟が確認され、赤岩遺跡、滝ノ上遺跡で弥生時代後

期の土坑が確認されている。

古墳時代

市内の久慈川流域には特に多くの古墳が存在し、富士山古墳群、糠塚古墳群、一騎山古墳群、鷹巣古墳群等が知られている。また、玉川流域では雷神山横穴群、岩欠横穴群等の横穴群が確認されている。那珂川流域の近隣では、7世紀後半の築造と考えられる赤岩1号墳が調査されている。集落遺跡では、概中遺跡で古墳時代前期・中期の竪穴建物跡4棟、西坪井遺跡で後期の竪穴建物跡7棟が検出されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は比較的多く調査が行われており、那珂川流域で主要な遺跡を挙げると、小野中道遺跡で9～10世紀にかけての竪穴建物跡24棟が確認されている。また、源氏平遺跡で竪穴建物跡17棟と掘立柱建物跡1棟が確認され、住居跡より漆紙文書が出土したことで注目される。緒川流域では、岡原遺跡で8世紀後半～9世紀にかけての竪穴建物跡12棟、掘立柱建物跡1棟が確認されている。近隣では、西嶋遺跡で竪穴建物跡1棟が確認されており、赤岩遺跡では竪穴建物跡4棟、奈良時代の土葬墓1基等が検出されている。また、三美中道遺跡と滝ノ上遺跡でも竪穴建物跡が1棟ずつ確認されている。

中世

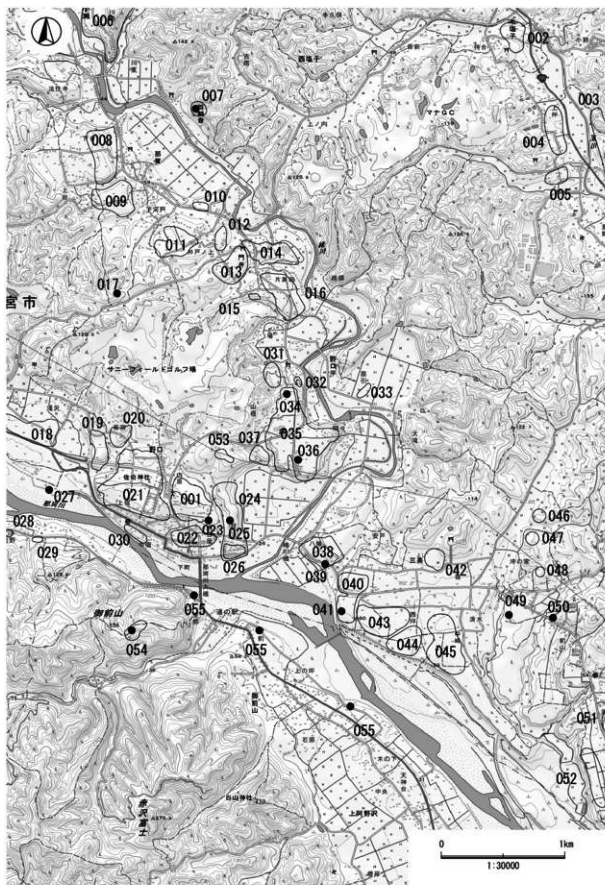
中世においては山間部に多くの城館跡が見うけられ、那珂川・緒川流域には、川野辺城跡(野口城跡)、新京寺(野口平)館跡、要害城跡、高ノ倉城跡等が分布している。赤岩遺跡では、15世紀後半に比定される葉研状の空堀跡が検出され、方一町規模の館が営まれていた可能性が指摘されている。

参考文献

- ・大宮町史編さん委員会 1977『大宮町史』大宮町
- ・井上義安他 1985『茨城県概中遺跡 - 大賀小学校校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大宮町教育委員会 概中遺跡発掘調査会
- ・御前山村郷土誌編纂委員会 1990『御前山村郷土誌』御前山村
- ・小川和博他 2009『西嶋遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会
- ・三輪孝幸他 2012『赤岩遺跡Ⅰ - 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査1』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第11集 常陸大宮市教育委員会
- ・高野浩之他 2013『赤岩遺跡Ⅱ - 三美中道遺跡Ⅰ - 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査2』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第15集 常陸大宮市教育委員会
- ・高橋清文他 2014『滝ノ上遺跡Ⅰ - 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査3』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第19集 常陸大宮市教育委員会
- ・三輪孝幸他 2014『山根遺跡 - 特別高圧架空送電線鉄塔新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第20集 常陸大宮市教育委員会
- ・青池紀子他 2015『三美中道遺跡Ⅱ 滝ノ上遺跡Ⅱ - 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査4』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第22集 常陸大宮市教育委員会
- ・高野浩一他 2016『北原遺跡Ⅱ - 市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第25集 常陸大宮市教育委員会
- ・田中浩江他 2016『滝ノ上遺跡Ⅳ - 畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査6』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第30集 常陸大宮市教育委員会

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期						番号	遺跡名	種別	時代・時期					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世				近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安
001	内原遺跡	集落跡		○	○	○			029	中平遺跡	集落跡		○				
002	待合遺跡	集落跡	○			○			030	上塚遺跡	集落跡	○		○			
003	東野城跡	城跡跡					○		031	野口平館跡	城跡跡				○		
004	東野仲坪遺跡	集落跡			○	○			032	成井遺跡	集落跡						
005	仲ノ内遺跡	集落跡	○			○	○		033	中島遺跡	集落跡			○	○		
006	川崎遺跡	包蔵地	○	○					034	樋内古墳	古墳			○			
007	那賀川向塚群	塚群						○	035	山根遺跡	集落跡	○	○	○	○		
008	那賀城跡	城跡跡	○				○		036	宮内古墳	古墳			○			
009	陣向坂向遺跡	包蔵地	○						037	矢口遺跡	集落跡	○	○		○		
010	萩崎遺跡	集落跡	○			○			038	八幡遺跡	集落跡				○		
011	井戸上遺跡	集落跡	○			○	○		039	八幡塚	塚跡					○	
012	清水遺跡	集落跡				○			040	赤岩遺跡	集落跡	○	○	○	○	○	○
013	岡原遺跡	集落跡	○		○	○			041	三美の宮跡	遺跡跡					○	
014	森前遺跡	集落跡	○			○			042	三美河岸遺跡	集落跡	○		○			
015	片七田遺跡	包蔵地							043	三美中道遺跡	集落跡	○	○	○	○		
016	下平道添遺跡	集落跡				○			044	滝ノ上遺跡	集落跡	○					
017	包蔵古墳	古墳			○				045	中崎遺跡	集落跡	○	○	○	○	○	
018	上川原遺跡	集落跡				○			046	泉沢B遺跡	集落跡	○					
019	若宮遺跡	集落跡	○			○			047	泉沢C遺跡	集落跡			○			
020	若宮戸遺跡	集落跡	○			○			048	泉沢A遺跡	集落跡	○					
021	西塚遺跡	集落跡	○		○	○	○		049	一の沢塚群	塚群					○	
022	内古原遺跡	集落跡				○	○		050	新山瓦窯跡	瓦窯跡				○		
023	時賀館跡	その他						○	051	小野天神前遺跡	集落跡	○	○		○		
024	御城遺跡	集落跡				○			052	小野中道遺跡	集落跡	○	○	○	○		
025	川野中城跡(野口城跡)	城跡跡					○		053	野口平笠館遺跡	包蔵地	○	○		○		
026	館遺跡	集落跡				○			054	御前山城	城跡跡					○	
027	墓塚塚	塚跡					○		055	赤沢江跡	用水堀跡					○	
028	葛野遺跡	包蔵地				○											



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡(国土地理院 地理院地図電子国土WEB 3万分の1より作成)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査区は、東側の調査区を第1調査区、西側の調査区を第2調査区とした。第1調査区の西部および第2調査区はトレンチャーにより著しく擾乱されている。また、第1調査区の中央部から北部を中心として、芋穴と考えられる長方形の擾乱及びピット状の擾乱が多数確認された。調査の結果、遺構は竪穴建物跡12棟、性格不明遺構1基、土坑1基、ピット13基が確認された。竪穴建物跡のうち、11棟は古墳時代前期に比定され、本遺跡は当該時期に営まれた集落跡であることが判明した。また、奈良・平安時代の竪穴建物跡1棟は平安時代前期(9世紀後半)に比定されるが、何らかの工房跡である可能性もある。性格不明遺構1基は、段切り遺構の可能性があり、出土遺物から時期は中世に比定される。土坑・ピットの大部分は、遺物の出土に乏しく、時期を特定することができなかった。

旧石器や縄文土器等は、表土や遺構の覆土から少数出土しているが、旧石器時代・縄文時代に比定される遺構は確認されなかった。十王台式土器が古墳時代の竪穴建物跡から出土しているが、弥生時代に比定される遺構は確認できなかった。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に14箱出土しており、土器類(縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器)、石器・石製品(打製石斧、石皿、磨石、敲石、凹石、砥石、礮石、管玉)、土製品(紡錘車、管状土錘)等である。なお、黒書土器が9世紀に比定される竪穴建物跡から5点出土している。

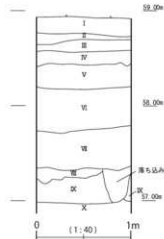
第2節 基本層序

本調査では基本層序観察のため、第1調査区西部(K10グリッド)にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。

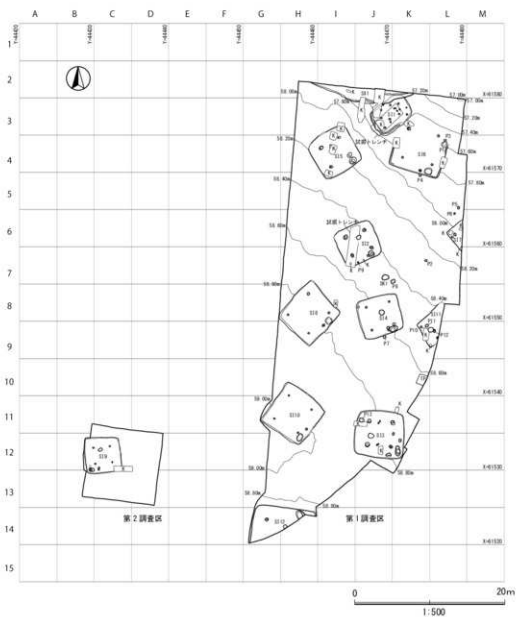
層序はI～X層まで認められた。I層は現耕作土層、II層は旧耕作土層である。III層は七本桜バミスを主体とするが、黒褐色ブロックが多く混じる。III層を遺構検出の目安としたが、第1調査区北部等の標高の低い場所では、IV層以下を遺構検出面とした。IV層は今市スコリアを主体とする。III層からIV層が今市・七本桜軽石層に比定される。V層は軟質ローム層、VI～VIII層は硬質ロームの含有の有無により分層した。なお、VIII層上面で落ち込みを確認した。落ち込みは後世の擾乱と考えられるが、旧石器時代ピットの可能性を残す。IX層は鹿沼軽石堆積層である。X層は明褐色のローム層で、強く締まっている。

土層解説

- I 10YR2/1 黒色 耕作土
- II 10YR3/2 暗褐色 旧耕作土
- III 5YR6/3 にぶい・褐色 七本桜バミス主体 黒褐色ブロック少量 褐色粒子多量 白色粒子多量
- IV 5YR6/8 褐色 今市スコリア主体 黒褐色ブロック微量 褐色粒子微量 白色粒子少量
- V 10YR7/6 明黄褐色 ローム層 白色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- VI 10YR6/6 明黄褐色 ローム層 粘性あり 締まり強い
- VII 10YR6/4 にぶい・黄褐色 ローム層 褐色粒子微量 粘性あり 締まり強い
- VIII 10YR6/3 にぶい・黄褐色 ローム層 鹿沼バミス少量 黒色粒子微量 粘性あり 締まり強い
- IX 10YR8/6 黄褐色 鹿沼バミス堆積層 粘性なし 締まり強い
- X 7.5YR5/6 明褐色 ローム層 白色粒子微量 粘性あり 締まり強い



第3図 基本土層図(1/40)



第4図 遺構全体図・グリッド設定図 (1/500)

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代

(1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は、第1調査区で10棟、第2調査区で1棟確認した。时期的には、古墳時代前期に比定される。

第2号竪穴建物跡 (S12) (第5・6図、表2)

位置 第1調査区I6・I7・J6・J7グリッド、標高58.40m地点に位置する。

規模と形状 長軸5.48m、短軸5.07mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wである。壁は確認面から最大高5cmで、外傾して立ち上がっている。

重複関係 第9号ピットに掘り込まれている。

土層 層厚が薄く、埋没状況は不明である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色：径1～2cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 4/4 褐色：径1～2cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 粘性やや弱い 締まり強い
(粘床構成土)
- 3 10YR 2/2 黒褐色：ローム粒子少量 褐色粒子少量 粘性あり 締まりあり (P2第1層)
- 4 10YR 3/4 暗褐色：ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり (P2第2層)

床 ほぼ平坦である。

壁溝 検出されていない。

炉 中央部やや北寄りに設けられている。炉の約1/2が試掘トレンチにより削平されている。長軸65cm、短軸53cmの不整楕円形を呈し、床面からの深さは最大2cmである。炉底はわずかに被熱した痕跡が認められた。

土層解説

- 1 10YR 4/6 褐色：黒褐色ブロック少量含む 粘土粒子微量含む 粘性あり 締まりやや強い
- 貯蔵穴 南壁近く、やや東寄りで検出された。形状は長径87cm、短径74cmの楕円形で、断面は上端が大きく開く逆台形状を呈する。床面からの深さは最大54cmである。底面はほぼ平坦である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色：ローム粒子少量 白色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色：ローム粒子少量 白色粒子微量 黒褐色ブロック多量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 7/6 明黄褐色：黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりあり

柱穴 5ヶ所確認でき、P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。規模は、P1：50cm×42cm、深さ69cm、P2：53cm×40cm、深さ66cm、P3：51cm×39cm、深さ69cm、P4：57cm×54cm、深さ84cm、P5：34cm×26cm、深さ35cmである。

P1～4土層解説

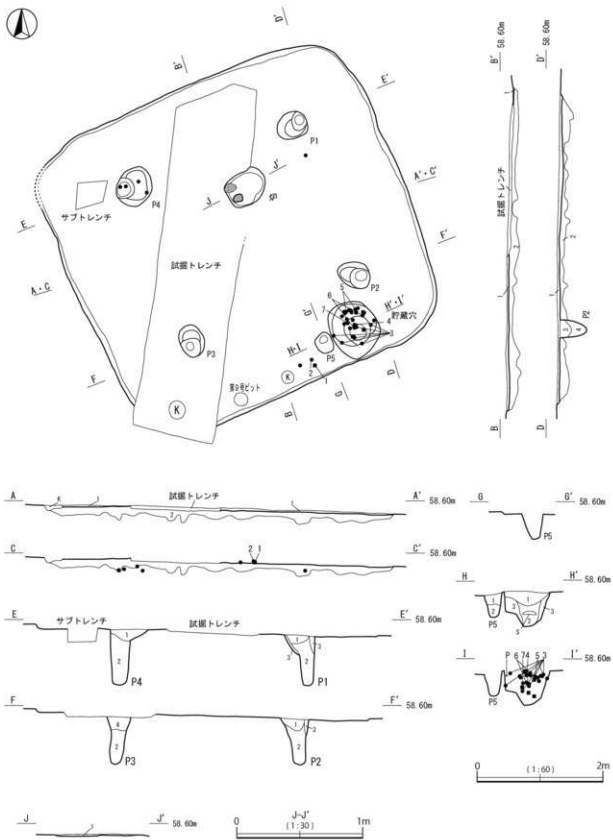
- 1 10YR 2/2 黒褐色：ローム粒子少量 褐色粒子少量 粘性あり 締まりあり (住居跡第3層)
- 2 10YR 3/4 暗褐色：ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり (住居跡第4層)
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色：径1～2cm大のロームブロック多量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 3/3 暗褐色：径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり

P5土層解説

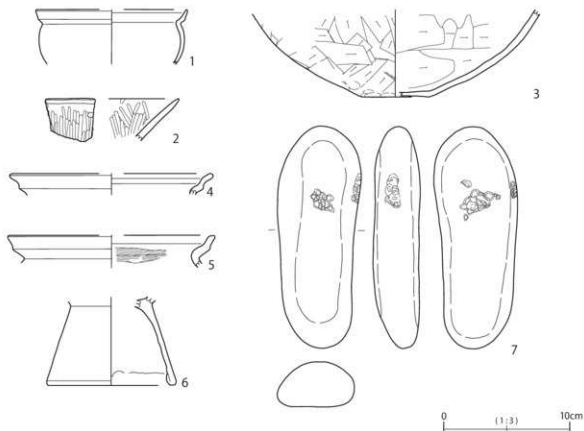
- 1 10YR 3/3 暗褐色：径2～3cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/4 暗褐色：ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(碗3点、埴1点、器台・高環類2点、壺・台付甕・甕類127点)、縄文土器片2点。1は土師器碗、2は土師器埴である。3は土師器壺と思われる。4～6はS字状口縁台付甕の口縁部である。7は砥石である。1・2は床面直上、3～7は貯蔵穴から出土した。

所見 遺構全体が削平を受けており、遺構検出時点で覆土がほとんど遺存していなかった。時期は、出土遺物から古墳時代前期である。



第5図 第2号竪穴建物跡実測図 (1/30・1/60)



第6図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

表2 第2号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	直径 (cm)	粘土	色調	手法の特徴(注)	出土位置	備考
1	土師器	椀	{12.0}	{4.3}	—	長石、石英	に濃い 棕色	口縁部内外面横ナズ、体部内面斜位のナズ、外面ナズ	床面直上	20% PL7
2	土師器	埴	—	{4.2}	—	長石、角閃石	に濃い 棕色	口縁端部ナズ、内外面ナズ後へラミガキ	床面直上	5% PL7
3	土師器	蓋	—	{6.9}	3	長石、石英、赤 色粘土	灰褐色	内外面横位・斜位のへラ削り	貯蔵穴	60% PL7
4	土師器	S字状 口縁 台付壺	{15.6}	{1.7}	—	長石、石英	褐色	口縁部内外面横ナズ	貯蔵穴	10% PL7
5	土師器	S字状 口縁 台付壺	{16.2}	{2.6}	—	長石、石英	黒褐色	内外面横ナズ	貯蔵穴	5% PL7
6	土師器	台付壺	—	{7.0}	{10.1}	長石、石英	に濃い 黄褐色	内面横位のナズ、外面ナズ	貯蔵穴	20% PL7
番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特徴		出土位置	備考
7	石器 (磁石)	17.5	6.6	3.7	672	砂岩	縦行裏3面		貯蔵穴	PL7

第3号竪穴建物跡 (S13) (第7・8図, 表3)

位置 第1調査区H12・J11・J12・K11・K12グリッド, 標高58.80m地点に位置する。

規模と形状 長軸6.70m, 短軸6.35mの隅丸方形を呈し, 主軸方向はN-87°-Wである。壁は確認面から最大高20cmで, 外傾して立ち上がっている。

重複関係 第13号ピットに掘り込まれている。

土層 ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: 径0.5~1cm大のロームブロック微量 ローム粒子微粒に少量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/2 黒褐色: 径1~3cm大のロームブロック少量 ローム粒子微粒に多量 粘性あり 締まりやや強い
- 3 7.5YR 4/3 褐色: ローム粒子微量 焼土粒子微粒に多量 粘性あり 締まりやや強い
- 4 10YR 2/2 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりやや強い (初覆土)
- 5 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 黄褐色粒子多量 粘性あり 締まりやや強い (貼床構築土)
- 6 10YR 5/2 灰黄褐色: 径1cm大のロームブロック微量 粘性あり 締まりあり (P7.9覆土)

床 おおむね平坦だが, 中央部から東部にかけては, 西部に比べてやや低くなっている。南壁近く, やや東寄りに周堤状の盛り上がりを確認したが, 用途は不明である。

土層解説

- 1 10YR 3/4 暗褐色土 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒少量 黒褐色ブロック多量 粘性やや強い 締まりやや強い

壁溝 検出されていない。

炉 中央部やや北寄りに設けられている。長軸81cm, 短軸66cmの不整形を呈し, 床面からの深さは最大5cmである。炉底はやや凹凸があり, 被熱により硬化している。

土層解説

- 1 10YR 3/3 暗褐色: ローム粒子多量 焼土粒子多量 粘性やや強い 締まりあり
- 2 10YR 4/4 褐色: ローム粒子微量 焼土粒子微量 粘性あり 締まりあり 焼熱によりやや赤変 (炉内層)

貯蔵穴 南東隅に設けられている。形状は長径140cm, 短径66cmの楕円形で, 断面は上端が大きく開く逆台形状を呈する。床面からの深さは最大47cmである。底面はほぼ平坦である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: ローム粒子少量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり

柱穴 10ヶ所確認できた。P1~4が主柱穴, P6~10が補助柱穴と考えられる。うち, P7・P8とP9・P10はそれぞれ掘りなおしたものと推測されるが, 新旧関係は不明である。P5は出入口ピットと考えられる。規模は, P1:61cm×50cm, 深さ73cm, P2:50cm×41cm, 深さ71cm, P3:63cm×59cm, 深さ86cm, P4:51cm×49cm, 深さ82cm, P5:47cm×36cm, 深さ30cm, P6:43cm×27cm, 深さ48cm, P7:23cm×16cm, 深さ26cm, P8:25cm×18cm, 深さ26cm, P9:21cm×20cm, 深さ61cm, P10:25cm×19cm, 深さ40cmである。

P1~4, P8, P10土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: 径2cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色: ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 4/3 灰黄褐色: 径1~2cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 粘性あり 締まりあり

P5土層解説

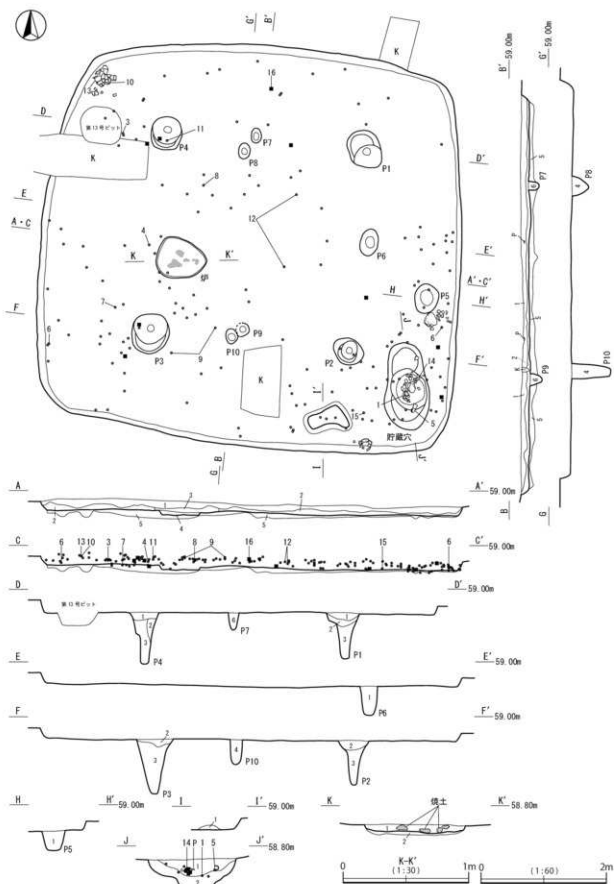
- 1 5YR 2/1 黒褐色: 径1cm大のロームブロック少量 粘性あり 締まりやや強い

P6土層解説

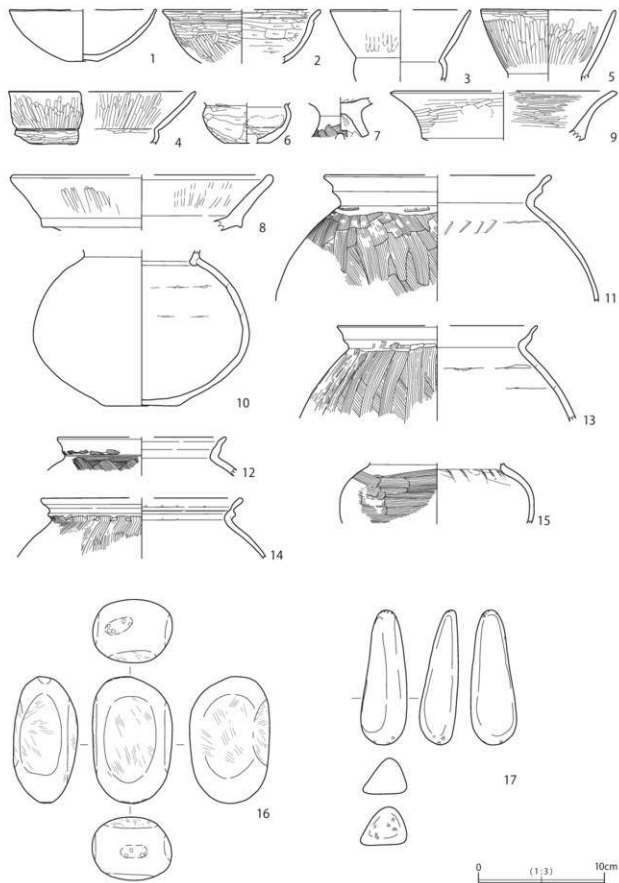
- 1 10YR 5/2 灰黄褐色: 径1cm大のロームブロック微量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(椀22点, 埴25点, 器台・高坏類13点, 壺・台付甕・甕類1215点), 縄文土器片18点, 陶磁器片4点, 石器2点。陶磁器片は攪乱からの出土である。遺物は多数出土したが, 大部分が床面から浮いた位置で出土しており, 住居廃絶後に一括して投棄されたものと思われる。1・5・14は貯蔵穴から, 4・6は床面やや上から, 7は土師器高坏の脚部で床面直上から出土している。

所見 補助柱穴を伴う住居は, 当遺跡では本跡のみである。遺物の出土状況および土層の堆積状況から, 住居廃絶後間もない頃に, 遺物を投棄するとともに人為的に埋め戻したものと推測される。時期は, 出土遺物から古墳時代前期である。



第7図 第3号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60)



第8图 第3号竖穴建物跡出土遺物実測図(1/3)

表3 第3号竪穴建物跡出土土物観察表

番号	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色澤	形状の特徴(注)	出土位置	備考
1	土師器	甗	[11.5]	4.1	2.4	長石、石英	にじみ 褐色	内外面ナデ	貯蔵穴	20% P1.7
2	土師器	甗	[12.4]	(4.3)	—	長石、白色粒子	にじみ 褐色	口縁部内外面横位のヘラミダギ、体部内面横位のヘラ割り、外面横位のヘラミダギ	4区覆土中 検出面	25% P1.7
3	土師器	甗	[11.0]	(5.7)	—	長石、石英、 チャート	褐色	内面磨整不明、外面横位のヘラミダギ(口縁部表面)	覆土中層 4区覆土中	20% P1.7
4	土師器	甗	—	(4.2)	—	長石、石英、 角閃石	にじみ 褐色	口縁部内外面横位のヘラミダギ、部部内外面横位のヘラミダギ	覆土下層	5% P1.7
5	土師器	甗	10.6	(5.7)	—	長石、石英	にじみ 赤褐色	口縁部内面ナデ、外面横位のヘラミダギ、口縁部内外面横位のヘラミダギ、口縁部内外面横位のヘラミダギ、部部外面横位のナデナカ	貯蔵穴	20% P1.7
6	土師器	甗	—	(3.2)	[3.6]	長石、石英、 角閃石	にじみ 褐色	部部付近内面横ナデ、部部付近外面ミダギ、体部内面ナデ、体部外面ヘラミダギ	覆土下層	30% P1.7
7	土師器	高坏	—	(3.1)	—	長石、石英、黒 色粒子、赤色粒 子	にじみ 褐色	内面ヘラナデ、部部内面ヘラナデ上辺り直、部部外面上部横位のナデ、下部斜位のハケ目、穿孔2ヶ所残存	検出面直上	20% P1.7
8	土師器	甗	[20.4]	(10.4)	—	長石、石英、 角閃石	にじみ 褐色	口縁部端直横ナデ、口縁部内外面横ナデの横縦位のヘラミダギ(部部付近外面一部ヘラミダギ)	覆土中層	5% P1.7
9	土師器	甗	[17.2]	(3.9)	—	長石、石英、 スツア	浅黄褐色	口縁部内外面横位のヘラミダギ	覆土上層	5% P1.7
10	土師器	甗	—	(12.3)	5.8	長石、石英、 チャート、スツア	にじみ 黄褐色	内外面とも厚塗(より不明瞭ナデナカ)	覆土中層	80% P1.7
11	土師器	S字状 口縁 付付甗	[17.8]	(10.0)	—	長石、石英、 チャート	明赤褐色	口縁部～部部横ナデ、体部内面ナデ、外面斜位横縦位のハケ目直上(10本/単位)	覆土中層 1区-3区覆土中	20% P1.8
12	土師器	S字状 口縁 付付甗	[13.2]	(3.1)	—	長石、石英	にじみ 褐色	口縁部～部部内外面横ナデ、体部内面ナデ、部部～体部外面横位・斜位のハケ目(10本/単位ナ)	覆土中層	10% P1.8
13	土師器	S字状 口縁 付付甗	[15.7]	(7.6)	—	長石、石英、 スツア	にじみ 褐色	口縁部内外面横ナデ、体部内面横位のナデ、体部外面斜位のハケ目の横縦位のハケ目	覆土中層	10% P1.8
14	土師器	S字状 口縁 付付甗	[15.8]	(4.8)	—	長石、角閃石、 白色粒子	にじみ 褐色	口縁部～部部内面横ナデ一部工具痕、口縁部外面横ナデ、内面ナデ、部部～体部外面横ナデ横縦位のハケ目、突帯屈付	貯蔵穴	10% P1.8
15	土師器	甗	—	(4.8)	—	長石、石英	黄灰色	体部内面横位のヘラ割り下部ナデ、部部～体部外面横ナデ、外面横位のハケ目直上(8本/単位)	覆土中層	5% P1.8

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	出土位置	備考
16	石部 (磁石)	10.1	6.4	5.0	490	安山岩	磨面3面、敲打痕2面	覆土中層	100% P1.8
17	石部 (磁石)	10.7	3.7	2.9	329	砂岩	敲打痕2面	覆土中層	100% P1.8

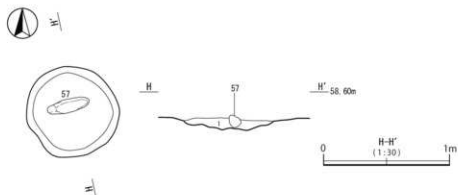
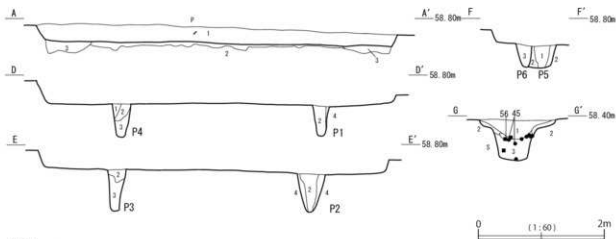
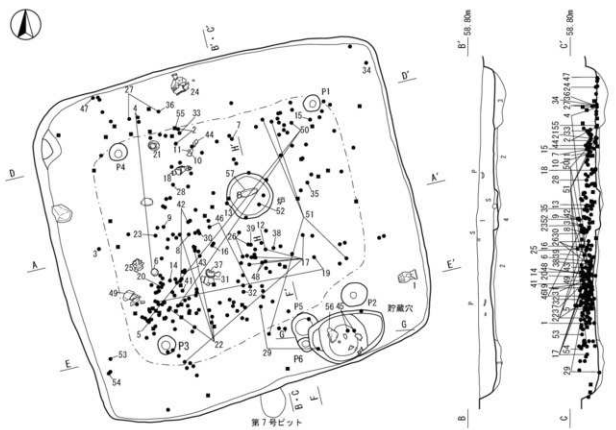
第4号竪穴建物跡 (S14) (第9～14図、表4～6)

位置 第1調査区J8・J9・K8・K9グリッド、標高58.60m地点に位置する。

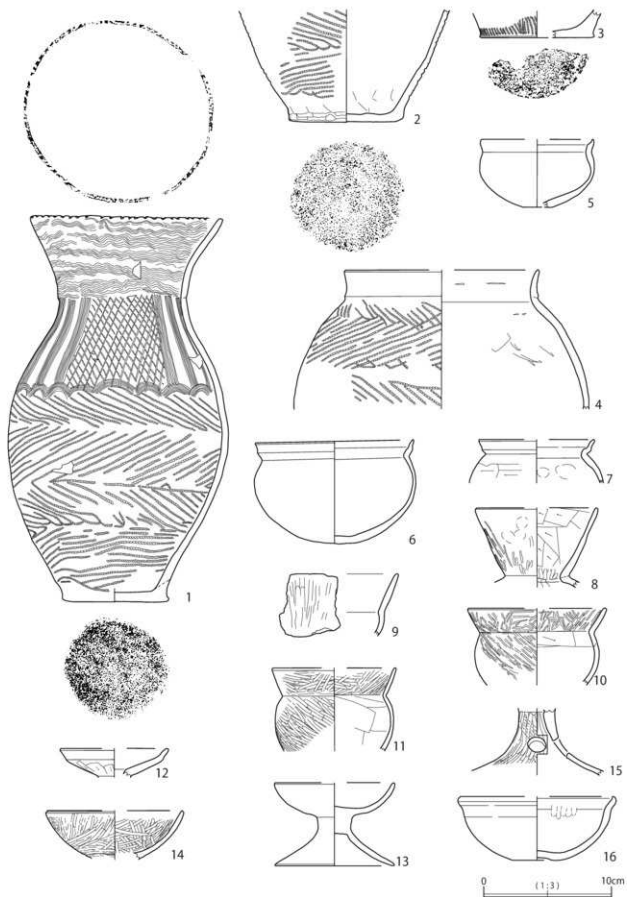
規模と形状 長軸5.74m、短軸5.26mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wである。壁は確認面から最大高36cmで、外傾して立ち上がっている。

重複関係 第7号ピットを掘り込んでいる。

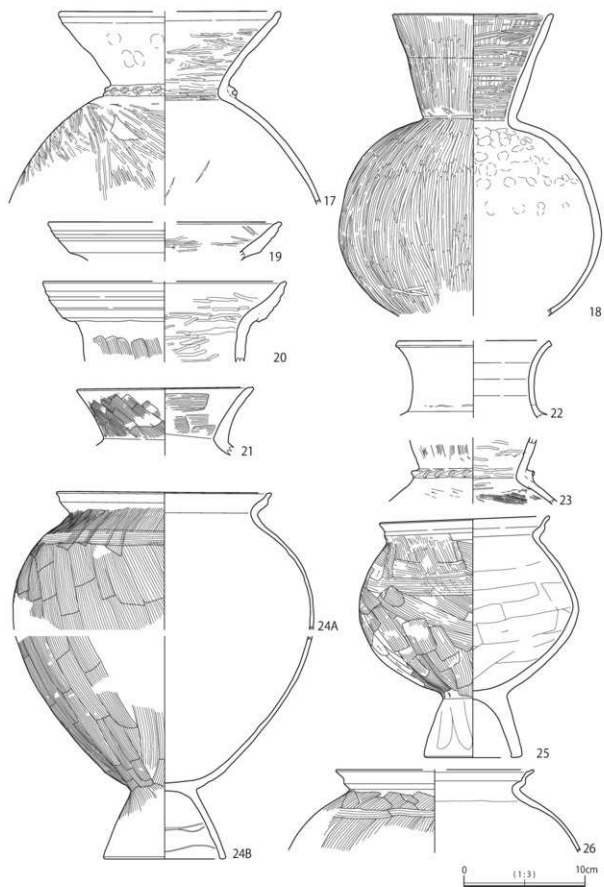
土層 黒褐色土の単一層であり、人為的な堆積状況を示している。



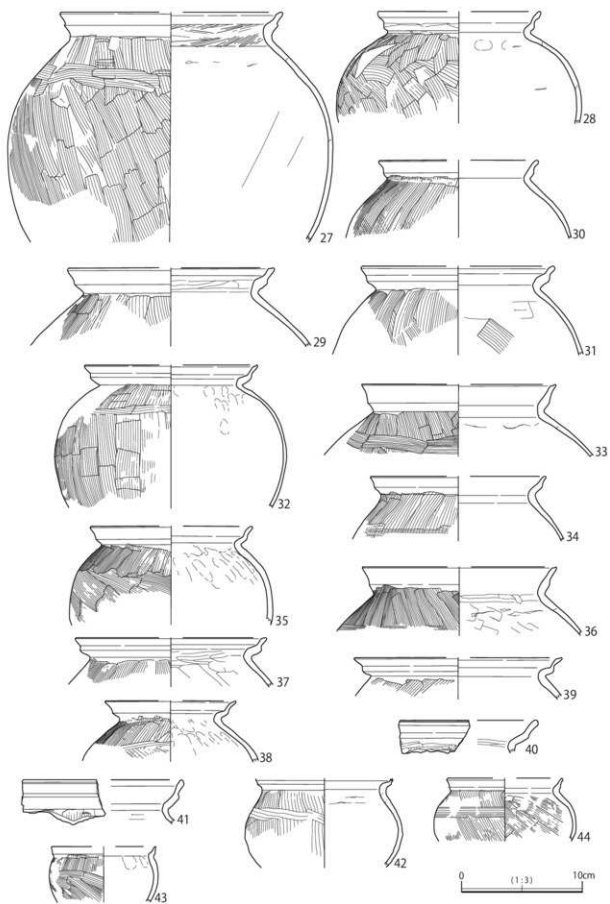
第9図 第4号竪穴建物跡実測図 (1/30・1/60)



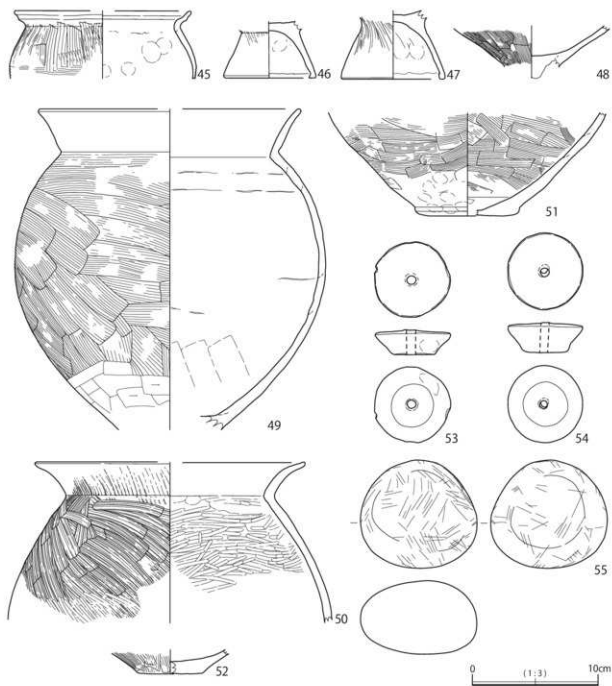
第10图 第4号竖穴建物跡出土遺物実測図①(1/3)



第11图 第4号竖穴建物跡出土遺物実測図②(1/3)



第 12 图 第 4 号竖穴建物跡出土遺物実測図③ (1/3)

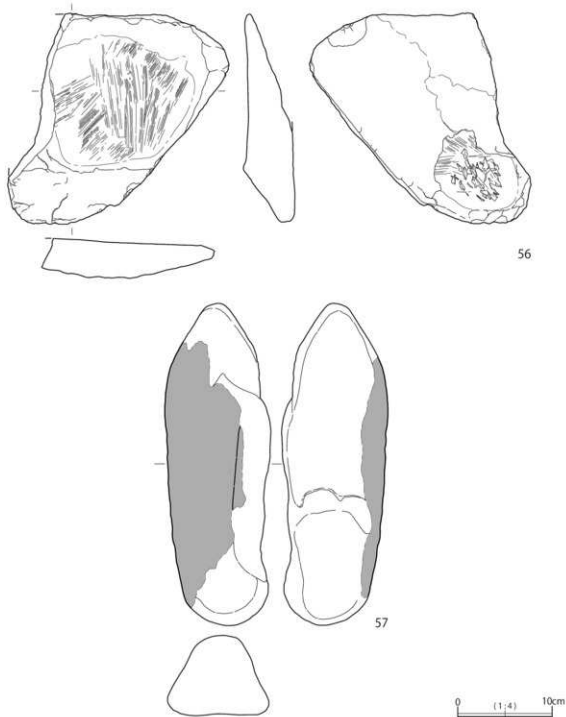


第13図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図④(1/3)

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色： 径1～3cm大のロームブロック微量 ローム粒子痕状に多量(特に層下部で顕著) 白色粒子微量
粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 5/4 赤い・黄褐色： 径1cm大のロームブロック少量 黒褐色ブロック少量 褐色粒子微量 白色粒子微量 粘性あり
締まり強い(筋床構築土)
- 3 10YR 3/4 暗褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 褐色粒子微量 粘性あり
締まりやや強い(筋床構築土)
- 4 10YR 4/4 褐色： ローム粒子少量 焼土ブロック微量 焼土粒子微量 粘性やや強い 締まりやや強い(砂覆土)

床 ほぼ平坦で、中央部が硬化している。中央部でやや浅く、壁面近くで幅70～90cmの壁溝状に掘って構築している。



第 14 図 第 4 号竪穴建物跡出土遺物実測図③ (1/4)

壁溝 検出されていない。

炉 中央部に設けられている。長径 73cm、短径 72cmの円形を呈し、床面からの深さは最大 10cmである。が底は凹凸があり、焼土粒子がわずかに散らばるのみで、被熱した痕跡は希薄である。中央部に、が底よりごくわずかに浮いた位置で、東西方向に棒状の枕石が置かれている。

貯蔵穴 南東隅付近に設けられている。形状は長径 122cm、短径 73cmの楕円形で、断面は上端が大きく開く逆台形状を呈する。床面からの深さは最大 63cmで、底面はほぼ平坦である。

表4 第4号竪穴建物跡出土土物観察表①

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	14.6	30.1	8.0	長石、石英	に濃い褐色	口縁縁部刻み目、口縁部狭長文、胴部～腰部縦位区画格子文、腰部附加横文、格子文と附加横文は漆黒文より区画。内面横位のヘラナデ、底部砂痕	NO.277	95%
2	弥生土器	壺	—	(8.8)	8.9	長石、石英、角閃石	棕色	腰部内面工具調整痕ナデ、腰部外面附加横文、下部ハケ削り痕ナデナ、底部内面ナデ、底部砂痕	NO.218 NO.224	20%
3	弥生土器	壺	—	(2.1)	(6.6)	石英、白色砂子	に濃い黄褐色	内面ナデ、外面附加条横文、底部ナデ・砂痕	NO.243	10%
4	弥生土器	甕	[15.0]	(10.9)	—	長石、石英、赤色砂子	に濃い褐色	口縁部内外面ナデ、腰部内面ヘラナデ後ナデ、外面ナデ後附加条横文	NO.226 No.227	20%
5	土師器	甕	(8.7)	5.3	(2.2)	長石、石英	に濃い黄褐色	口縁部内外面横ナデ、腰部外側縦位のヘラナデ底部付近ヘラ削り、腰部内面横位のナデ	NO.156	40%
6	土師器	甕	12.2	8.2	—	長石、石英、雲母、チャート、スコーリア	浅黄褐色	口縁部内外面コナデ、腰部外面横位のヘラ削り、底部ナデ	NO.266 418	80%
7	土師器	甕小	(9.0)	(3.4)	—	長石、石英	に濃い褐色	口縁部～頸部内外面横ナデ、腰部内面ナデ・指頭痕、外面横位のヘラ削り	NO.206	20%
8	土師器	埴	(9.3)	(6.2)	—	長石、石英、角閃石、赤褐色砂子、黒色砂子	明黄褐色	口縁部縁部横ナデ、口縁部外面刻み縦位のヘラヒギキ、口縁部～首部内面ナデ(首部付近ヘラヒギキ)、胴部外面ナデ	NO.180	30%
9	土師器	埴	—	(4.9)	—	長石、石英、角閃石	に濃い褐色	口縁部内面ナデ、口縁部外面～腰部ヘラヒギキ後ナデ、腰部内面工具調整痕ナデ	NO.193	5%
10	土師器	埴	[10.6]	(6.0)	—	長石、角閃石	棕色	口縁部ヘラヒギキ、首部内面ヘラ削り、腰部外面ハケ日後ヘラヒギキ(首部付近縦位のヘラヒギキ)、腰部内面ナデ	NO.275	20%
11	土師器	埴	(9.4)	(6.5)	—	長石、石英、角閃石	明黄褐色	口縁部～腰部内面ヘラヒギキ、口縁部横ナデ、口縁部外面～腰部外面ヘラヒギキ	NO.275 418覆土中	20%
12	土師器	甕台	(8.2)	(2.3)	—	長石、石英	浅黄褐色	口唇部横ナデ、内面ナデ、外面縦位のヘラ削り	418覆土中	30%
13	土師器	高杯	(9.3)	6.5	9.3	長石、石英	浅黄褐色	口縁部内外面コナデ、腰部外面ナデ、胴部外面縁部内面コナデ、内面ナデ	NO.271	70%
14	土師器	高杯	[10.6]	(3.8)	—	長石、石英、赤色砂子、黒色砂子	に濃い赤褐色	口縁部横ナデ、腰部内外面ヘラヒギキ(外面半周線)	NO.143	30%
15	土師器	高杯	—	(5.2)	—	長石、角閃石	黄灰色	胴部内面上部仕上げ横溝、下部ナデ、胴部外面上部ナデ、胴位のハケ日後縦位のヘラヒギキ、下部縦位のハケヒギキ	NO.20	5%
16	土師器	鉢	[12.0]	(5.0)	3.8	長石、石英	に濃い黄褐色	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ後縦位のヘラヒギキ、外面ナデ	NO.174	50%
17	土師器	壺	[18.4]	(15.4)	—	長石、石英、角閃石、白色砂子、黒色砂子	に濃い褐色	口縁部縁部横ナデ、口縁部～胴部内面横位のヘラヒギキナデ、口縁部外面ナデ・指頭痕、胴部外面条部付近横溝ナデ・工具による剥痕、腰部内面ナデ(一部土着痕)、外面縦位・横位のヘラヒギキ	NO.50 NO.73 NO.74 NO.80 NO.86 NO.107	10%
18	土師器	壺	13.0	(24.0)	—	長石、石英、角閃石	棕色	口縁部～首部内面縦位横溝のヘラヒギキ、口縁部外面縦位のヘラヒギキ、胴部外面縦位のヘラヒギキ、腰部内面指頭痕横溝ナデ、外面縦位のヘラヒギキ	NO.272	70%
19	土師器	壺	[19.0]	(3.1)	—	長石、石英	棕色	口縁部内外面横ナデ、口縁部内面下部ナデ・ヘラヒギキ	NO.51 no.139 11区覆土中 3区覆土中	5%
20	土師器	壺	[19.8]	(6.4)	—	長石、石英、チャート、赤色砂子	棕色	口唇部内外面横ナデ、内面下部ナデ後横位のヘラヒギキ、外面横位のナデ、縦位のハケ日(7～10本/単位)	NO.161	5%
21	土師器	壺	14.3	(5.4)	—	長石、石英、チャート	に濃い黄褐色	口唇部～口縁部内面横位のハケ日後ナデ、口縁部外面上部仕上げ横溝ナデ、外面縦位のハケ日(9～10本/単位)、胴部内面調整不明痕	NO.279	20%
22	土師器	壺	[12.4]	(6.1)	—	長石、石英、角閃石	明黄褐色	口縁部内外面横ナデ、首部付近内面横位のナデ	NO.116 NO.131 NO.172 NO.181	20%
23	土師器	壺	—	(5.2)	—	長石、石英	棕色	口縁部～胴部内面ナデ後ヘラヒギキ・指頭痕、口縁部外面縦位のハケ日後横ナデ、胴外面横溝ナデ(工具による剥痕・調整痕付)、腰部外面横位のヘラ削りナデ	NO.191	5%
24	土師器	S字状口縁台付壺	17.5	—	9.9	長石、石英、角閃石、赤色砂子	に濃い褐色	口縁部内外面横ナデ、胴部～腰部内面横位のナデ、外面縦位のハケ日(11～15本/単位)後横位のハケ日(9本/単位)、台部内外面縦位のヘラヒギキナデ、内面一部工具痕、外面上部縦位のハケ日(6～9本/単位)	NO.276	80%

表5 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表②

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土師器	S字状 口縁 台付甕	13.8	19.2	8.1	長石、石英、 チラー、赤色粒子	に高い 棕色	口縁部～頸部横ナデ、体部内面横位・斜位へのへり削り、下部縦位のへり削り、外面斜位のハケ目後縦位・横位のハケ目(10～12本/単位)、上端へり削り後縦位のハケ目、台部内面横位のへりナデ、外面縦位のへりナデ	覆土中層	60% PL9
26	土師器	S字状 口縁 台付甕	[16.2]	16.0	—	長石、石英	に高い 黄棕色	口縁部～頸部内外面横ナデ、体部内面ナデ、外面斜位(右下55°)縦斜位(左下55°)のハケ目(10～12本/単位) 後横位のハケ目(4～5本/単位)	覆土中・下層	30% PL10
27	土師器	S字状 口縁 台付甕	[18.0]	18.2	—	長石、角閃石、 白色粒子	黒褐色	口縁部内外面横ナデ(外面一部工具削)、頸部内面斜位のハケ目、体部内面斜位のナデ-接合部、外面縦位・斜位のハケ目(6～11本/単位)、外面横位着	覆土下層	20% PL10
28	土師器	S字状 口縁 台付甕	[13.3]	18.8	—	長石、角閃石、 白色粒子	黒色	口縁部内外面横ナデ、頸部内面横ナデ、外面縦位の調整、体部内面ナデ、上部ナデ・指痕筋、外面斜位のハケ目(5～7本/単位)後縦位のハケ目(6～8本/単位)	覆土上層	25% PL10
29	土師器	S字状 口縁 台付甕	[17.7]	16.2	—	長石、石英、 角閃石	暗棕色	口縁部内外面横ナデ、頸部内面工具ナデ、体部内面ナデ、体部外面縦位のハケ目	覆土上・下層	30% PL10
30	土師器	S字状 口縁 台付甕	[13.0]	18.2	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	に高い 褐色	口縁部内外面横ナデ、頸部～体部内面ナデ、頸部外面工具ナデ、体部縦位のハケ目(10本/単位)	覆土上層	10% PL10
31	土師器	S字状 口縁 台付甕	[15.8]	17.0	—	長石、石英、赤 色粒子	灰黄褐色	口縁部～頸部内外面横ナデ、体部内面縦位・斜位の工具ナデ(上部ナデ)、外面斜位後縦位のハケ目(10～12本/単位)	覆土中層	10% PL10
32	土師器	S字状 口縁 台付甕	[14.2]	[11.3]	—	長石、石英	黒褐色	口縁部～頸部内外面横ナデ、体部内面上部ナデ・指痕筋、内面下部ナデ、外面縦位のハケ目(11本/単位)か 外面一部横位のハケ目(6本/単位)か	床面直上	25% PL10
33	土師器	S字状 口縁 台付甕	[15.8]	15.7	—	長石、石英、角 閃石、黒色粒子、 赤色粒子	灰褐色	口縁部横ナデ、頸部～体部内面斜位のナデ、体部外面縦位・横位のハケ目(7～8本/単位)	覆土中層	20% PL10
34	土師器	S字状 口縁 台付甕	[14.4]	15.1	—	長石、角閃石、 赤色粒子	に高い 棕色	口縁部内外面～頸部内面横ナデ、体部内面ナデ、頸部～肩部外面ナデ後斜位のハケ目、肩部外面ナデ後縦位・横位のハケ目(9～10本/単位)	床面直上	5% PL10
35	土師器	S字状 口縁 台付甕	[13.2]	17.8	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	黒褐色	口縁部内外面横ナデ、体部内面ナデ、外面斜位のハケ目後縦位のハケ目(15～20本/単位)、外面横位着	覆土下層	20% PL10
36	土師器	S字状 口縁 台付甕	[16.0]	15.4	—	長石、石英、黒 色粒子、赤色粒 子	に高い 赤褐色	口縁部内外面横ナデ、頸部～体部内面へり削り後ナデ-接合部、体部外面横位・斜位のハケ目(9～13本/単位)	覆土下層	20% PL10
37	土師器	S字状 口縁 台付甕	[15.6]	13.0	—	長石、白色粒子	暗灰色	口縁部内外面横ナデ、肩部内面へり削り、体部外面縦位のハケ目、体部内面斜位のナデ(不明瞭)	覆土下層	5% PL10
38	土師器	S字状 口縁 台付甕	[10.7]	14.0	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	に高い 褐色	口縁部内外面～体部内面横ナデ、頸部～肩部外面縦位のハケ目・横位のハケ目(縦位のハケ目3本/単位か、横位のハケ目3本/単位)	覆土下層	10% PL10
39	土師器	S字状 口縁 台付甕	[17.7]	13.8	—	長石、石英、 角閃石	暗灰色	口縁部内外面～頸部内外面横ナデ、体部内面ナデ、体部外面斜位のハケ目(ハケ目9本/単位)	覆土下層	5% PL10
40	土師器	S字状 口縁 台付甕	—	12.6	—	長石、石英、 角閃石	に高い 黄棕色	口縁部内外面横ナデ、頸部内面へりナデ、外面へりナデ一部へりナデ	3K覆土中	5% PL10
41	土師器	S字状 口縁 台付甕	—	13.5	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	に高い 黄棕色	口縁部内外面横ナデ、頸部内面縦位のへり削り、外面縦位のハケ目(10～12本/単位)	覆土上層	5% PL11
42	土師器	S字状 口縁 台付甕	[11.3]	17.0	—	長石、石英、赤 色粒子	灰白色	口縁部内外面～体部内面調整痕線、体部外面縦位のハケ目(9～12本/単位)後横位のハケ目(3～4本/単位)	覆土上・下層 横出面	10% PL11
43	土師器	S字状 口縁 台付甕	[8.5]	14.4	—	石英	に高い 棕色	口縁部内外面横ナデ、体部内面ナデ、頸部～体部外面上部縦位のハケ目、体部外面下部横位・斜位のハケ目(8本/単位)	3K覆土中	10% PL11
44	土師器	S字状 口縁 台付甕	[9.4]	15.0	—	長石、角閃石	棕色	口縁部内外面～頸部内面横ナデ、頸部～体部内面斜位のハケ目(7～8本/単位)か、外面縦位のハケ目(底部横位のハケ、12～13本/単位)	覆土中層	30% PL11
45	土師器	S字状 口縁 台付甕	[13.9]	15.4	—	長石、石英、 角閃石	棕色	口縁部内外面横ナデ、頸部～体部内面指痕直ナデ-接合部、外面縦位のハケ目(7本/単位)か、底部外面縦位のハケ目(6本/単位)か	貯蔵穴	10% PL11
46	土師器	台付甕	—	14.5	7.3	長石、角閃石	に高い 黄棕色	内面ナデ、頸部内面ナデ・指痕筋、外面上部斜位のハケ目・下部ナデ(黒染め)、底部横ナデ	覆土中層	20% PL11

表6 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表③

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
											長さ (cm)
47	土師器	台付甕	—	5.0	18.0	—	長石、石英、 角閃石	褐色	内面ナデ。器底内面土師工具調整後ナデ。下部指環痕。外面上部縦位のハケ目(本来)単位ナデ。外面下部～底部横ナデ	覆土直上	10% PL11
48	土師器	台付甕	—	13.0	—	—	長石、角閃石、 白色粒子	に高い 赤褐色	内面ナデ。内面下部工具調整後ナデ。外面縦位のハケ目(12本/単位ナ)	覆土下層 2区覆土中	8% PL11
49	土師器	台付甕	(20.4)	(24.3)	—	—	長石、石英、 角閃石	に高い 褐色	口縁部内面横位のハケ目後横位のナデ。外面横ナデ(不明確)。内面ナデ。下部工具調整後ナデ。外面横位・斜位のハケ目(10～12本/単位)。下部横位のハケ目。口縁部～体部上部縦付痕	覆土下層	70% PL11
50	土師器	甕	(21.2)	(12.8)	—	—	長石、角閃石、 白色粒子	に高い 褐色	口縁部～頸部内面横ナデ。外面縦位のハケ目後横ナデ。体部内面土師調整のハケ目ナデ。内面下部へナデナ。外面上部斜位のへナデナ。外面下部斜位のへナデナ	覆土上～下層	5% PL11
51	土師器	甕	—	8.2	5.9	—	長石、石英、白 色粒子、褐色粒 子、繊維	に高い 黄褐色	体部内外面横位のハケ目(外面底部付近指環痕、ナデ)。底面ナデ	覆土下層	10% PL11
52	土師器	甕 または 壺	—	(1.0)	(5.3)	—	長石、石英、 角閃石	に高い 褐色	内面工具による彫りナデ。外面縦位のハケ目。底部 工具付	伊内	5% PL11
番号	器種	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土					
53	土製品 (粘縛車)	6.0	2.0	0.8	64	長石、石英	全面ナデ、一部指環痕			覆土上層	100% PL11
54	土製品 (粘縛車)	5.9 ～6.1	2.4	0.6 ～0.7	75	長石、石英	全面ナデ			覆土上層	100% PL11
番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質					
55	石器 (磨石)	8.6	9.3	5.8	704	砂岩	磨面2面			覆土下層	PL11
56	石器 (砥石)	22.2	(23.0)	5.5	2450	粘板岩	砥面2面。その他は自然面			PL11	
57	石器 (伊石)	34.1	11.2	8.3	1400	火山岩	焼熱2面			伊内	PL11

土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色： ローム粒子形状に多量 褐色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色： 径1～2cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 3/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 褐色粒子微量 粘性やや強い 締まりあり

柱穴 6ヶ所確認でき、P1～4が主柱穴、P5・P6が出入口ピットと考えられる。P6はP5を掘りなおしたものである。P5・P6ともに貯蔵穴に掘り込まれている。規模は、P1：30cm×27cm、深さ48cm、P2：42cm×36cm、深さ61cm、P3：30cm×28cm、深さ65cm、P4：29cm×26cm、深さ52cm、P5：42cm×(39)cm、深さ23cm、P6：23cm×(16)cm、深さ16cmである。

P1～4土層解説

- 1 10YR 4/4 褐色： 黒褐色ブロック微量 粘性やや弱い 締まりやや強い
- 2 10YR 3/4 暗褐色： 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色： ローム粒子多量 粘性やや強い 締まりやや強い
- 4 10YR 5/2 に高い黄褐色： 黒褐色ブロック微量 粘性やや弱い 締まりあり

P5・P6土層解説

- 1 10YR 5/2 灰黄褐色： ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 褐色粒子微量 締まり弱い
- 2 10YR 5/1 褐色： ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 白色粒子少量 締まり弱い
- 3 10YR 5/3 に高い黄褐色： 径1～2cm大のロームブロック多量 黒褐色ブロック少量 締まりあり

遺物出土状況 弥生土器片12点、土師器片(椀28点、埴27点、器台1点、高環3点、器台・高環埴26点、鉢1点、壺36点、台付甕116点、甕24点、壺・台付甕・甕類1292点)、土製品2点、縄文土器片1点、石器3点。遺物は多数出土したが、大部分が床面から浮いた位置で出土しており、住居廃絶後に一括して投棄されたものと思われる。1はほぼ完形で西壁際の床面直上から出土した。4～11いずれも覆土上層～中層から出土した。15・17は床面直上から出土した。24A・Bは北壁際の床面直上から出土した1個体であるが、破片が足りず1個体として接合・復元することができなかったのでA・Bとして図示した。45は貯蔵穴から出土した。53・54は土製粘縛車であり、覆土上層から出土した。57は炉石であり、焼熱した痕跡がある。

所見 遺物の出土状況および土層の堆積状況から、住居廃絶後間もない頃に、遺物を投棄するのととも人為的に埋め戻したものと推測される。十王台式土器とS字状口縁台付甕が共存しているのが特筆される。時期は、出土遺物から古墳時代前期である。

第5号竪穴建物跡(S15) (第15図、表7)

位置 第1調査区H4・I3・I4・I5・J4グリッド、標高58.20m地点に位置する。

規模と形状 長軸5.82m、短軸5.80mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-13°-Wである。削平により床面が失われているため、壁は不明である。掘方は外傾して立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 削平およびトレンチャーによる擾乱により、貼床の一部のみ遺存する状態であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 10YR4/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子微量 黒褐色ブロック微量 白色粒子微量 粘性あり 締まり強い (貼床構築土)
- 2 10YR4/4 褐色: ローム粒子少量 焼土ブロック少量 焼土粒子少量 粘性やや弱い 締まりやや強い (伊麗土)

床 削平により失われている。

壁溝 検出されていない。

炉 中央部、やや北寄りに設けられている。擾乱およびトレンチャーにより大部分が壊されているため、形状は不明である。遺存する部分での規模は長軸50cm、短軸14cm、確認面からの深さは最大で9cmである。

土層解説

- 1 10YR4/4 褐色: ローム粒子少量 焼土ブロック少量 焼土粒子少量 粘性やや弱い 締まりやや強い

貯蔵穴 東隅付近に設けられている。形状は長径100cm、短径87cmの楕円形で、断面は逆台形状を呈する。確認面からの深さは最大で57cmである。底面はやや傾斜している。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: ローム粒子痕跡に多量 褐色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 2/3 黒褐色: ローム粒子多量 褐色粒子少量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 3/4 暗褐色: ローム粒子多量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い

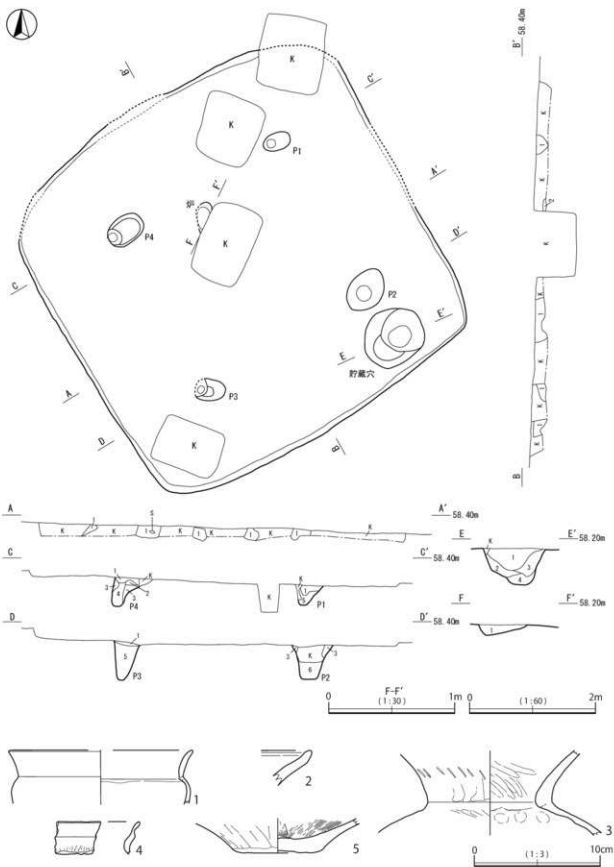
柱穴 4ヶ所確認でき、P1～4が主柱穴と考えられる。出入口ピットはトレンチャーによる擾乱のため確認できなかった。規模は、P1:45cm×27cm、深さ31cm、P2:74cm×53cm、深さ52cm、P3:(48)cm×35cm、深さ61cm、P4:60cm×43cm、深さ45cmである。

土層解説

- 1 10YR 3/2 黒褐色: ローム粒子痕跡に少量 褐色粒子微量 白色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/4 暗褐色: ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 3/4 暗褐色: 径0.5～1cm大のロームブロック少量 ローム粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 2/3 黒褐色: ローム粒子微量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 5 10YR 4/1 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子微量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 6 10YR 3/3 暗褐色: 径1～2cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 粘性やや強い 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(坏・皿類3点、椀5点、埴3点、器台・高環類7点、壺・台付甕・甕類277点)、縄文土器片2点、陶磁器6点、瓦1点。遺物はほとんどがトレンチャーによる擾乱から出土したため、本跡に帰属する確実な遺物は貯蔵穴内からの出土した少数に限られる。2は貯蔵穴から出土した。

所見 全体が著しく削平を受けており、検出時点で既に床面が失われていた。また、全面にトレンチャーによる擾乱が夥しく入り、確認面ではピット等の確認が不可能であったため、掘方近くまで掘り下げて、ピット等の確認を行った。また、遺構の形状についても、トレンチャーによる擾乱のため、壁面がはっきりしなかったため、地山を追いかけることで形状を確認した。本跡に帰属する確実な出土遺物は少ないものの、時期は、古墳時代前期と推測される。



第15图 第5号竖穴建物跡実測图(1/30·1/60)·出土遺物実测图(1/3)

表7 第5号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴(注)	出土位置	備考
1	土師器	椀か	14.4	18.3	—	長石、石英、黄 褐色、赤色粒子	褐色	口縁部内外面横ナズ、体部内外面ナズ	3区1層5中	20% P.11
2	土師器	壺	—	12.8	—	長石、石英	に高い 褐色	内外面横ナズ	貯蔵穴	5% P.11
3	土師器	壺	—	16.7	—	長石、石英、黄 褐色、白色粒子、 スロア	褐色	口縁部～頸部内面へツギキ底ナズ(部分的に凹いへ アツギキ)、口縁部～頸部外面へツギキ(不明瞭)、体 部内面ナズ・指痕あり、体部外面へツギキの後へツギ キ	3区覆土中	20% P.12
4	土師器	S字状 口縁 台付壺	—	12.6	—	長石、石英、 黄褐色	に高い 黄褐色	内外面横ナズ、頸部外面ハケ目	3区覆土中	5% P.12
5	土師器	壺	—	12.7	15.4	長石、石英、黄 褐色、スロア	に高い 黄褐色	内面斜位のハケ目(不明瞭)、外面へツギキ、底部 未調整	4区覆土中	10% P.12

第6号竪穴建物跡 (S16) (第16・17図, 表8)

位置 第1調査区J4・K3・K4・K5・L3・L4, 標高57.40～57.80m地点に位置する。

規模と形状 北部が削平により不明であるが、長軸6.62m, 短軸7.00mの方形を呈するものと推測され、主軸方向はN-13°-Eである。削平により床面の大部分が失われているため、壁は不明である。掘方は外傾して立ち上がる。

重複関係 東部で第1・3号ピットに掘り込まれ、南部で第4号ピットを掘り込んでいる。

土層 層厚が薄く、埋没状況は不明である。

土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色: ローム粒子多量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/3 暗褐色: 径1～2cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 粘性やや強い 締まり強い
(粘土構成土)

床 南部から中央部では一部が遺存しているが、中央部から北部では失われており、遺構検出時点で貼床が露出していた。遺存する部分の床面はやや北に向かって傾斜し、凹凸がある。

壁溝 西壁際から南西隅際にかけて、および東壁際から南東隅際にかけて遺存している。幅16～23cm, 断面の形状は逆台形型である。土層の観察から、南壁中央辺りに壁溝は巡っていなかったと考えられる。

土層解説

- 1 10YR 4/4 褐色: 径0.5～1cm大のロームブロック微量 黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりやや強い

炉 確認できなかった。削平により失われたと推測される。

貯蔵穴 南壁際、南東隅付近に設けられている。形状は長径102cm, 短径90cmの楕円形で、断面は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子微量 褐色粒子微量 白色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/4 暗褐色: 径2～3cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり 締まり強い

柱穴 5ヶ所確認でき、P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。規模は、P1: 33cm×32cm, 深さ59cm, P2: 31cm×27cm, 深さ59cm, P3: 29cm×28cm, 深さ58cm, P4: 51cm×40cm, 深さ56cm, P5: 41cm×34cm, 深さ21cmである。

P1～4土層解説

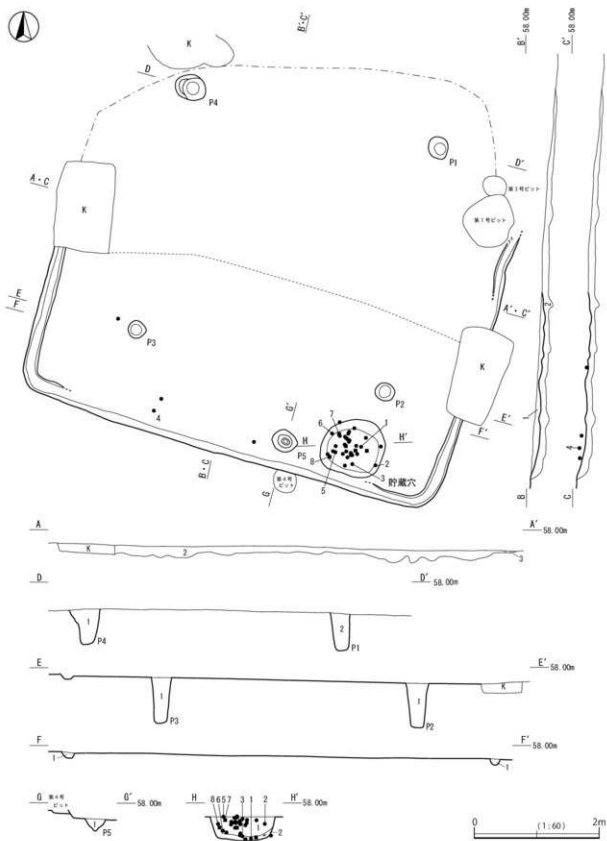
- 1 10YR 3/4 暗褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/4 暗褐色: ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりあり

P5土層解説

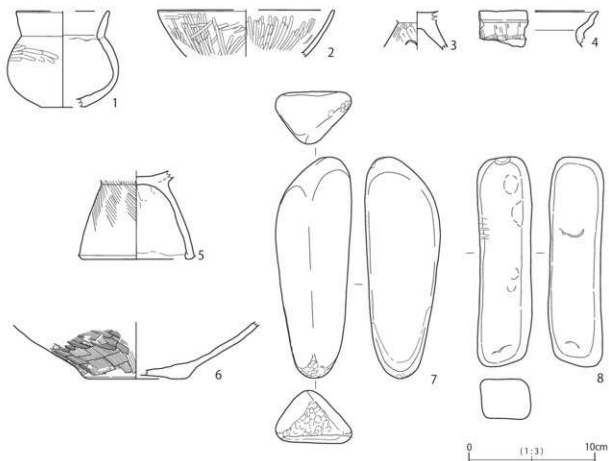
- 1 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック含む ローム粒子少量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(坏2点, 椀2点, 埴2点, 高坏1点, 壺・台付甕・甕類76点), 縄文土器片1点, 石器2点。4が床面直上から、それ以外は貯蔵穴から出土した。

所見 遺構全体が著しく削平を受けている。遺構検出時点で、南部から中央部に床面がわずかに残る程度であり、中央部から北部では貼床が露出しており、北部では遺構プランが確認できなかった。当遺跡で壁溝を伴う住居は本跡のみである。時期は、出土遺物から古墳時代前期である。



第16图 第6号竖穴建物跡実測图(1/60)



第 17 図 第 6 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

表 8 第 6 号竪穴建物跡出土遺物観察表

種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器 罎	[7.4]	(7.5)	[3.5]	長石、石英、 角閃石	棕色	口縁部内外面コナダ、胴部内面ナダ、外表面印後 ナダ、部分的にヘラミガキ(剥落のため不明瞭)	貯蔵穴	50% P.12
2	土師器 卍 または 高坏	[14.0]	(3.7)	—	長石、石英、角閃 石、黒色粒子、 赤色粒子。	に高い 緑色	口縁部横ナダ、内外面ヘラミガキ	貯蔵穴	10% P.12
3	土師器 高坏	—	(3.0)	—	長石、角閃石	に高い 黄棕色	内面ナダ、外面ヘラミガキ後ナダヘラミガキ	貯蔵穴	40% P.12
4	土師器 S字状 口縁 台付甕	—	(2.9)	—	長石、石英、角 閃石、黒色粒子、 赤色粒子。	に高い 棕色	口縁部内外面横ナダ、口縁部内面ナダ、 口縁部外面縦位のハケ目	床面直上	5% P.12
5	土師器 台付甕	—	(7.0)	8.6	長石、石英、角 閃石、白色粒子	に高い 緑色	底部内面ナダ、台部内面ナダ(一部指痕)、台部 外面縦位のハケ目(縦部付込横ナダ)	貯蔵穴	20% P.12
6	土師器 甕	—	(4.5)	(7.6)	長石、石英、 角閃石	明褐色	内面剥離、体部外面縦位・斜位のハケ目、 底部ナダ	貯蔵穴	10% P.12
番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	出土位置	備考
7	石器 (砥石)	17.5	6.1	4.2	507	砂岩	敲打面・面、その他は自然面	貯蔵穴	P.12
8	石器 (砥石)	16.5	4.3	3.1	466	凝岩	砥面・面、その他は自然面	貯蔵穴	P.12

第7号竪穴建物跡(S17) (第18・19図, 表9)

位置 第1調査区L6・L7グリッド, 標高58.00m地点に位置する。

規模と形状 本跡の東半分が調査区外にあると推測される。調査できた部分での規模は長軸3.36m, 短軸2.82mであって, 方形もしくは長方形を基調としたプランが想定される。壁は確認面から最大高14cmで, 外傾して緩やかに立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 層厚が薄く, 埋没状況は不明である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: 径1~2cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 棕色粒子多量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色: 径3cm大のロームブロック微量 黒褐色ブロック少量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりやや強い (粘床構造土)

床 ほぼ平坦で, 北東部に堤状の盛り上がりがある。

壁溝 検出されていない。

炉 検出されていない。

貯蔵穴 検出されていない。

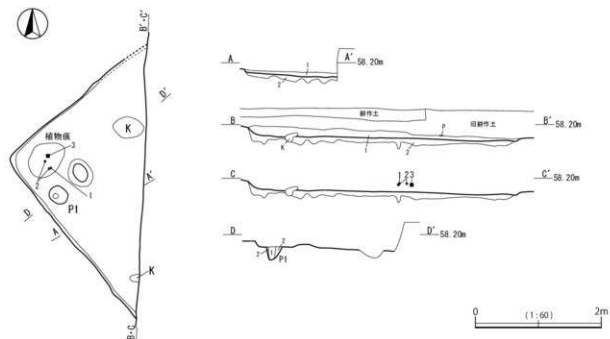
柱穴 1ヶ所確認できた。規模は, P1: 30cm×25cm, 深さ20cmである。

土層解説

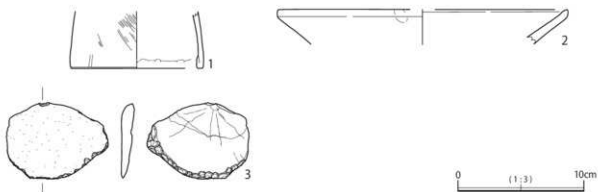
- 1 10YR 2/2 黒褐色: ローム粒子少量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 3/2 黒褐色: 径1~2cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 棕色粒子多量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(台付甕・甕類45点), 石器1点。遺物は, 大部分が北東部の植物痕からの出土である。そのほかは覆土中より細片が少数出土した。1~3は植物痕からの出土遺物である。

所見 東部が調査区外にあり, かつ出土遺物も少量のうえ, 大半が土師器の細片であるため, 十分な情報を得ることができず, 詳細は不明である。時期は, 出土遺物から古墳時代前期と推測される。



第18図 第7号竪穴建物跡実測図(1/60)



第19図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3)

表9 第7号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種類	図種	口径 (cm)	脚高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	台付甕	—	(4.5)	[10.4]	石英、角閃石	明褐色	内面横ナズ、外面ハケ目横ナズ、端部すり面ナズ	植物痕	10% P1.12
2	土師器	壺	[22.9]	(2.7)	—	長石、角閃石、白色粒子	暗灰色	口唇部コナズ、内面横位のヘナズ、外面縦位のヘナズ、内外面横付着	植物痕	5% P1.12
番号	図種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴		出土位置	備考
3	石器 (磨石)	6.1	8.1	1.1	61	砂岩	片面自然面、表裏に加工痕		植物痕	P1.12

第8号竪穴建物跡 (S18) (第20・21図、表10)

位置 第1調査区 H7・H8・H9・I8・I9 グリッド、標高 58.80 m 地点に位置する。

規模と形状 長軸 6.28m、短軸 6.26mm の方形を呈し、主軸方向は N-45°-W である。削平により床面が失われているため、壁は不明である。掘方は外傾して立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 削平およびトレンチャーによる攪乱により、貼床の一部のみ遺存する状態であるため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 10YR 3/4 暗褐色： 径1～2m大のロームブロック微量 ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 白色粒子少量 粘性あり 締まり強い (貼床構築土)

2 10YR 4/3 に近い黄褐色： 径1～2m大のロームブロック多量 黒褐色ブロック少量 粘性やや強い 締まり強い (貼床構築土)

床 削平により失われている。

壁溝 検出されていない。

炉 検出されていないが、トレンチャーによる攪乱内から炉石と考えられる被熱した痕跡のある棒状の石が出土しているため、枕石を伴う炉が存在した可能性がある。

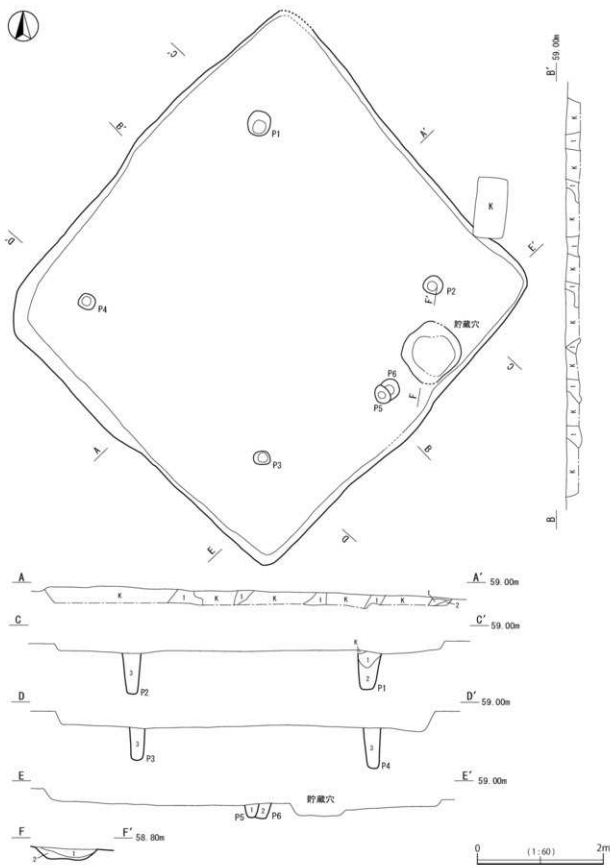
貯蔵穴 南東壁際、やや北寄りの位置に設けられている。形状は長軸 88cm、短軸 84cm の不整形円で、断面は逆台形状を呈する。確認面からの深さは最大 18cm である。底面はやや凹凸がある。

土層解説

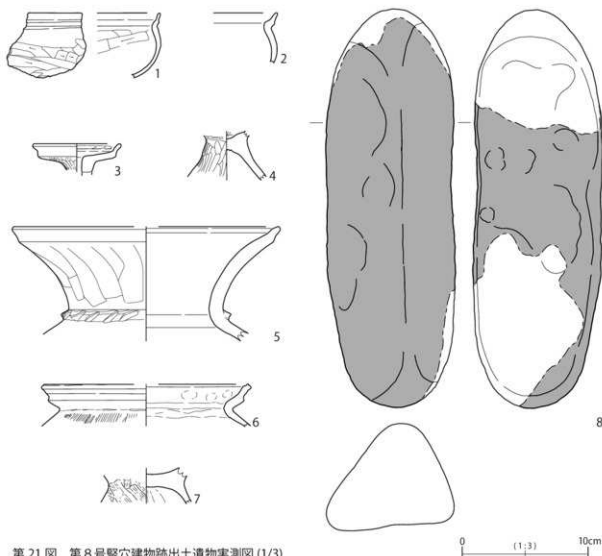
1 10YR 2/3 黒褐色： ローム粒子塊状に少量 褐色粒子少量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり

2 10YR 2/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 褐色粒子少量粘性あり 締まりやや強い

柱穴 6ヶ所確認され、P1～4が主柱穴、P5・P6が出入口ピットと考えられる。P5はP6を掘りなおしたものである。規模は、P1：39cm×34cm、深さ60cm、P2：31cm×29cm、深さ64cm、P3：26cm×21cm、深さ50cm、P4：26cm×24cm、深さ64cm、P5：30cm×23cm、深さ19cm、P6：(19cm)×31cm、深さ23cmである。



第20图 第8号竖穴建物跡实测图(1/60)



第 21 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

表 10 第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴①	出土位置	備考
1	土師器	碗	—	(5.2)	—	石英、角閃石、白色粒子	黄灰色	口縁部内外面横ナズ、体部内面上部横位のヘラナズ、下部ナズ、外面横位のヘラ削り	検出面	5% PL12
2	土師器	碗	—	(4.0)	—	長石、石英、黒色粒子、赤色粒子	に高い 橙色	口縁部内外面横ナズ、体部内面ナズ、外面ヘラナズ	検出面	5% PL12
3	土師器	器台	6.8	(2.2)	—	角閃石、赤色粒子	に高い 黄褐色	口縁部内面横位のヘラミダキ、外面横ナズ、体部内面ヘラナズ、外面縦位のミダキ、底部二次転用による研磨跡	トレンチヤー	50% PL12
4	土師器	高坏	—	(3.9)	—	長石、石英、角閃石	に高い 橙色	内面ナズ・ヘラナズ、腰部内面ナズ(黒染・刷割あり)、外面縦位のヘラミダキ	1区 掘方	5% PL12
5	土師器	甕	(21.8)	(9.1)	—	長石、石英、角閃石	黄褐色	口縁部内外面横ナズ、口縁部内面横位のヘラナズ、外面横位のヘラナズ、頸部外面突帯貼付・種状工具による刺突文・横ナズ、体部内面ナズ、外面ヘラ削り	1区 掘方 2区 掘方	20% PL12
6	土師器	字字状口縁台付甕	(16.2)	(3.3)	—	石英、白色粒子	黒褐色	口縁部内外面横ナズ内面凹頭組、頸部内面ヘラナズ、体部内面ナズ、頸部・体部外面縦位のヘラノ後部部横ナズ(8~10本/単位)	3区 掘方	10% PL12
7	土師器	台付甕	—	(2.8)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	褐色	内面ナズ、台部内面ナズ、外面斜位のハケ目(8本/単位)	2区 掘方	5% PL12
番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考	
8	石器 (卵石)	31.6	10.2	9.2	3500	安山岩	全体的に披熟	トレンチヤー	PL13	

P1～4土層解説

- 1 10YR 3/1 黒褐色: 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 棕色粒子微量白色粒子少量 粘性やや強い 締まりやや強い
- 2 10YR 4/1 褐色: 径1cm大のロームブロック少量 白色粒子少量 粘性やや強い 締まりやや強い
- 3 10YR 4/1 褐色: 径0.5～1cm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 粘性やや強い 締まりやや強い

P5・6土層解説

- 1 10YR 3/2 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 2/2 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 棕色粒子微量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(坏1点, 椀5点, 器台1点, 高坏1点, 壺・台付甕・甕類239点), 炉石1点, 縄文土器片2点。遺物は全てトレンチャーによる掘削からの出土物であるため, 本跡に帰属する確実な遺物はない。8はトレンチャーによる掘削からの出土遺物であるが, 全体的に被熱しており, 炉石と思われる。

所見 第5号竪穴建物跡と同様, 遺構全体が著しく削平を受けており, 検出時点で既に床面が失われていた。また, 全面にトレンチャーによる掘削が夥しく入り, 遺構確認面ではビット等の確認が不可能であったため, 掘方近くまで掘下げて, ビット等の確認を行った。また, 遺構の形状についても, トレンチャーによる掘削のため, 壁面がはっきりしなかったため, 地山を追いかけることで形状を確認した。本跡に帰属する確実な出土遺物はないものの, 時期は出土遺物の傾向から古墳時代前期と推測される。

第9号竪穴建物跡(SI9)(第22・23図, 表11)

位置 第2調査区B12・B13・C12・C13グリッド, 標高58.80m地点に位置する。

規模と形状 北西隅が掘削により壊されている。長軸4.80m, 短軸4.80mの方形を呈し, 主軸方向はN-4°-Wである。壁は確認面から最大高27cmで, 外傾して立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 上層～中層にかけてトレンチャーによる掘削を受けている。ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色: 径1～2cm大のロームブロック微量 ローム粒子微状に多量 棕色粒子を少量含む 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 2/2 黒褐色: ローム粒子微状に少量 白色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 3 10YR 3/4 暗褐色: 径1～3cm大のロームブロック多量 ローム粒子微量 棕色粒子微量 粘性やや強い 締まり強い
- 4 10YR 3/2 黒褐色: ローム粒子微状に多量 棕色粒子微状に多量 白色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 5 10YR 3/1 黒褐色: ローム粒子微量 棕色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 6 10YR 2/2 黒褐色: 径1cm大のロームブロック多量 ローム粒子多量 棕色ブロック少量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 7 10YR 4/3 赤い黄褐色: 径0.5cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック多量 棕色粒子少量 粘性あり 締まり強い (粘床構築土)
- 8 10YR 3/3 暗褐色: 径1～2cm大のロームブロック多量 ローム粒子微量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりあり (粘床構築土)

床 ほぼ平坦で, 中央部が硬化している。南西隅近く, 貯蔵穴すぐ北側の床面上で焼土塊を検出した。裁ち割ったところ, 中から砂岩質の石1点が出土した。この焼土塊の用途・性格は不明である。掘方は, 中央部で浅く, 壁面近くで幅35～65cm程度の壁溝状に掘って構築している。

焼土塊土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色: 焼土粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 2.5YR 4/6 赤褐色: 粘性弱い 締まり強い 焼土
- 3 7.5YR 4/2 灰褐色: 焼土粒子多量 棕色粒子多量 粘性あり しまり強い

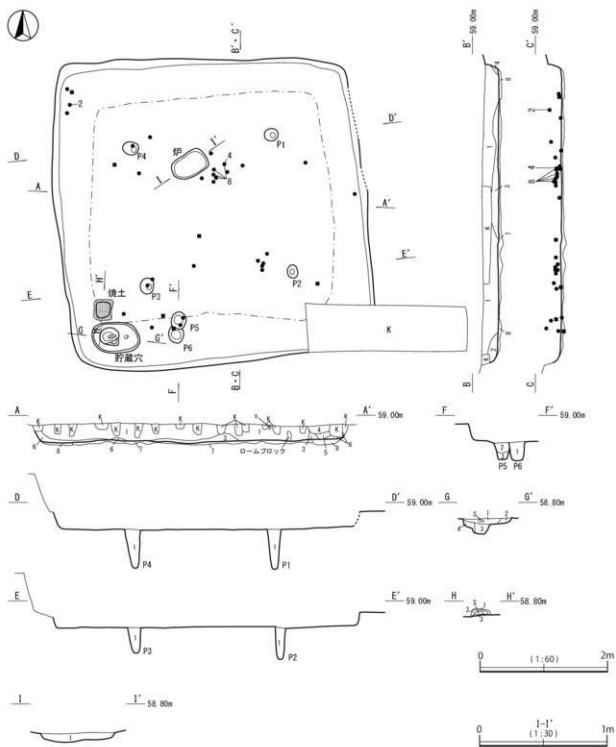
壁溝 検出されていない。

炉 中央部やや北寄りに設けられている。長径58cm, 短径36cmのやや不整形な楕円形を呈し, 床面からの深さは最大7cmである。炉底はほぼ平坦で, 被熱によりわずかに硬化している。

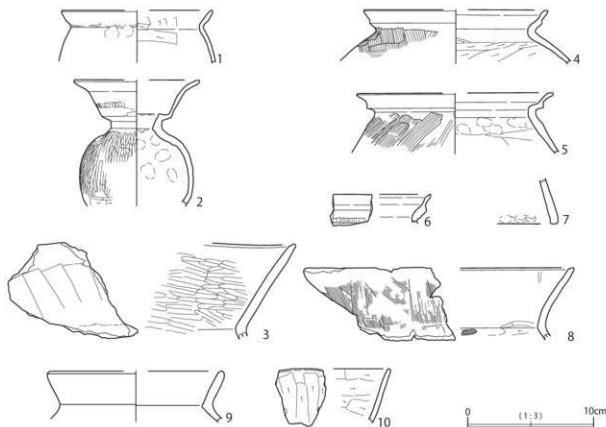
土層解説

- 1 10YR 3/3 暗褐色: 径0.5cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 焼土粒子少量 粘性あり 締まりやや強い
底面が被熱によりわずかに硬化

貯蔵穴 南西隅近くに設けられている。形状は長径76cm, 短径48cmの楕円形で, 断面は大きく開く変則的な逆台形状を呈する。確認面からの深さは最大で24cmである。底面はほぼ平坦である。



第 22 図 第 9 号竪穴建物跡実測図 (1/30・1/60)



第23図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3)

表11 第9号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴①②③	出土位置	備考
1	土師器	椀	11.8	4.1	—	長石、チャート、 黒色粒子、赤色 粒子	にぶい 黄褐色	口縁部内外面横ナズ、頸部～体部内面へラ削り、体 部外面斜位のヘラナズ・指頭痕・接合痕	覆土中	10% PL13
2	土師器	蓋	9.8	10.0	—	長石、石英、チャ ート、白色粒子、黒色 粒子、赤色粒子	にぶい 黄褐色	口縁部～頸部内面横ナズ、口縁部外面横ナズ、体部 内面ナズ・指頭痕・接合痕、頸部～体部外面へラミガ キ(体部下段横位のへラ削り)	覆土上層	40% PL13
3	土師器	蓋	—	7.6	—	長石、石英	角閃 褐色	口縁部横ナズ、口縁部～頸部内面横位のへラミガ キ、口縁部外面縦位のへラミガキ、端部外面横位の ナズ	1区覆土中 4区覆土上	5% PL13
4	土師器	S字状 口縁 台付椀	14.4	4.3	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子、 スコア	にぶい 黄褐色	口縁部内外面横ナズ(内部一部黒濁)、頸部内面へラ ナズ、体部内面横ナズ後へラ削り、外面横ナズ後縦 位のハケ目(8～12本/単位)	覆土中層	10% PL13
5	土師器	S字状 口縁 台付椀	11.5	4.8	—	長石、石英、 角閃石	褐色	口縁部～頸部内外面横ナズ、体部内面ナズ後指頭 痕、外面へラ削り斜位ハケ目(8～14本/単位)	3区覆土中	5% PL13
6	土師器	甕	—	2.5	—	長石、石英	黒色	内外面横ナズ、外面下段縦位のハケ目	2区覆土中	5% PL13
7	土師器	台付椀	—	3.6	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	にぶい 黄褐色	内外面ナズ(内面下部指頭痕)	覆土中	5% PL13
8	土師器	甕	—	5.7	—	長石、石英、 チャート	にぶい 黄褐色	口縁部～口縁部内面横位のナズ後へラミガキ不明瞭、口縁部外面横ナズ後ハケ目、口縁部～頸部 外面斜位縦位のハケ目(13～16本/単位)、頸部内 面横ハケ目削り、口縁部外面窪付帯	覆土上～中層 1区覆土中	5% PL13
9	土師器	甕	13.6	4.1	—	長石、石英、角 閃石、白色粒子	灰褐色	口縁部内外面横ナズ、頸部内面横位のナズ、外面 斜位のナズ	1区覆土中	5% PL13
10	土師器	甕	—	4.3	—	長石、石英、 角閃石	褐色	内面横位のへラ削り、外面縦位のへラ削り	1区覆土中	5% PL13

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色： ローム粒子少量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/2 黒褐色： 径0.5mm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 3/2 黒褐色： ローム粒子少量 褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 3/4 暗褐色： ローム粒子多量 粘性やや強い 締まりあり

柱穴 6ヶ所確認され、P1～4が主柱穴、P5・P6が出入口ピットと考えられる。P5はP6を掘りなおしたものである。規模は、P1：22cm×19cm、深さ62cm、P2：20cm×16cm、深さ49cm、P3：24cm×20cm、深さ40cm、P4：25cm×21cm、深さ61cm、P5：26cm×23cm、深さ27cm、P6：(22)cm×23cm、深さ23cmである。

P1～4土層解説

- 1 10YR 6/3 に赤・黄褐色： 径0.5mm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック微量 褐色ブロック微量 粘性あり 締まりやや強い

P5・6土層解説

- 1 10YR 3/2 黒褐色： ローム粒子少量 黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色： ローム粒子多量 黒褐色ブロック微量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 3/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(椀1点、壺・台付甕・甕類424点)、縄文土器片1点、陶磁器片4点。陶磁器片はトレンチャーによる攪乱からの出土である。2は覆土上層、4・8は覆土上層～中層から出土した。

所見 トレンチャーによる攪乱を受けているが、遺存状態は比較的良好である。規模は当遺跡の住居の中で最も小さい。時期は、出土遺物から古墳時代前期である。

第10号竪穴建物跡(S10)(第24・25図、表12)

位置 第1調査区G11・H10・H11・H12・I11グリッド、標高59.00m地点に位置する。

規模と形状 長軸4.64m、短軸4.64mの方形を呈し、主軸方向はN-53°-Wである。覆土の遺存している部分から、壁は高さ25cm程度と推測される。掘方は外傾して立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 トレンチャーによる攪乱が著しく、覆土が部分的にしか遺存していないため、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色： ローム粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 7.5YR 3/2 暗赤褐色： ローム粒子多量 焼土粒子多量 粘性やや強い 締まりあり
- 3 10YR 3/4 暗褐色： 径3cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 粘性あり 締まりやや強い(単床構造土)

床 トレンチャーによる攪乱が著しく、部分的にしか遺存していないため、状況は不明である。

壁溝 検出されていない。

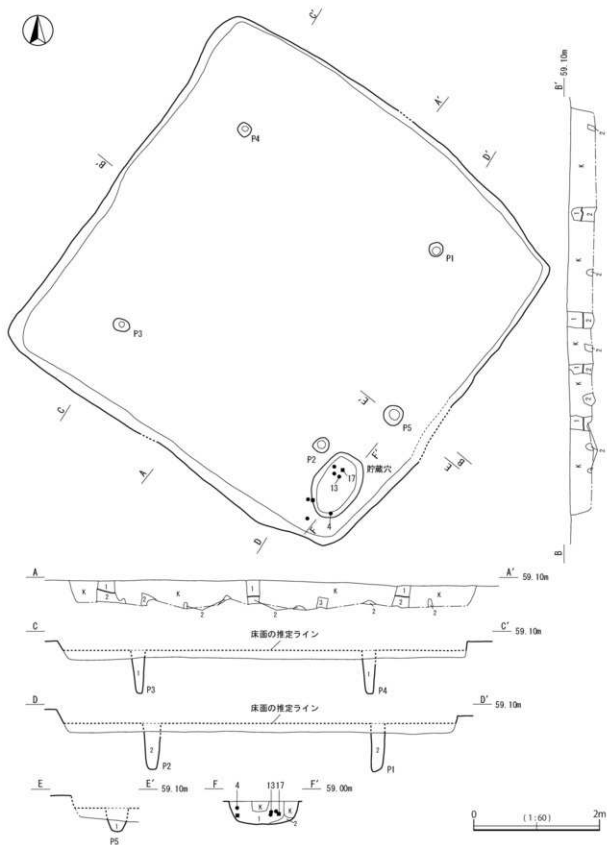
炉 検出されていないが、中央部や北西寄りの土層断面で焼土粒子を多量に含んだ覆土を確認したため、このあたりに炉が存在した可能性がある。また、トレンチャーによる攪乱内より、枕石と思われる被熱した痕跡のある棒状の石が出土しており、炉石を伴う炉であった可能性がある。

貯蔵穴 南隅近くに設けられている。形状は長径106cm、短径73cmの楕円形で、断面は逆台形状を呈する。確認面からの深さは最大23cmである。底面はほぼ平坦である。

土層解説

- 1 10YR 2/3 黒褐色： ローム粒子多量含 褐色粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 10YR 4/4 褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子微量 褐色ブロック微量 粘性あり 締まりやや強い

柱穴 5ヶ所確認され、P1～4が主柱穴、P5が出入口ピットと考えられる。規模は、P1：23cm×23cm、深さ61cm、P2：26cm×23cm、深さ60cm、P3：26cm×20cm、深さ56cm、P4：22cm×21cm、深さ55cm、P5：32cm×30cm、深さ25cmである。



第 24 図 第 10 号竪穴建物跡実測図 (1/60)

P1~4土層解説

1 10YR 2/3 黒褐色： 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子微量 粘性あり 締まりあり

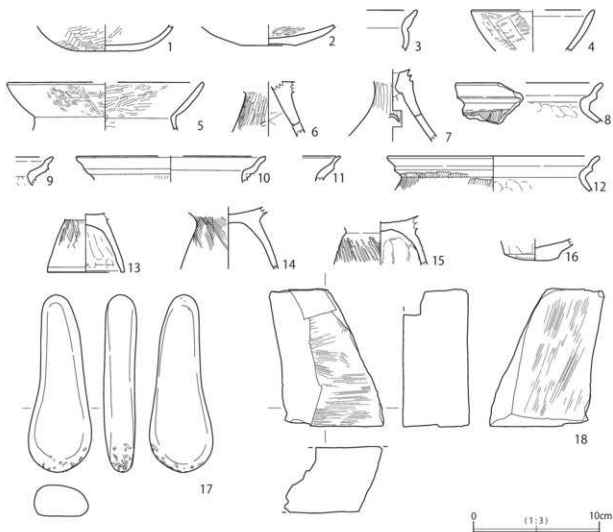
2 10YR 2/3 黒褐色： ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり

P5土層解説

1 10YR 4/1 褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子多量 褐色粒子少量 粘性やや弱い 締まりあり

遺物出土状況 土師器片（環類2点、椀1点、埴5点、器台4点、壺・台付甕・甕類510点）、須恵器片（坏2点）、縄文土器片3点、陶磁器片14点、石器1点。遺物はほとんどがトレンチャーによる攪乱から出土したため、本跡に帰属する確実な遺物は貯蔵穴から出土した少数に限られる。図示したもののうち4・13・17は貯蔵穴から出土し、その他はほとんどトレンチャーによる攪乱からの出土である。

所見 当遺跡で確認された住居跡の中で、最もトレンチャーによる攪乱を受けており、遺構確認面では床面の遺存の有無の確認ができなかったため、掘方近くまで掘り下げて、床面およびピット等の確認を行った。また、遺構の形状についても、トレンチャーによる攪乱のため、壁面がはっきりしなかったため、地山を追いかけることで形状を確認した。本跡に帰属する確実な出土遺物は少ないが、出土遺物の傾向から、時期は古墳時代前期と推測される。



第25図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3)

表 12 第 10 号竪穴建物跡出土物観察表

番号	種別	跡種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坪	—	(2.1)	(4.2)	長石、石英、角閃石、白色粒子	緑灰色	内面縦位のヘラミガキ、外面横位のヘラミガキ、底部ヘラ削り	1区覆土中	10% PL13
2	土師器	甕 または 坪	—	(1.6)	(4.2)	長石、石英、角閃石、チャート	褐色	内面ヘラミガキ、外面縦位のヘラナゲ、底部ナゲ	2区覆土中	5% PL13
3	土師器	埴	—	(3.2)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子	にぶい 黄褐色	口縁縁部横ナゲ、内外面ナゲ	1区覆土中	5% PL13
4	土師器	埴	(9.6)	(3.3)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	にぶい 黄褐色	内面横ナゲ、外面ヘラ削り後ヘラミガキか	貯蔵穴	10% PL14
5	土師器	埴	(15.4)	(3.8)	—	長石、石英	にぶい 褐色	口縁縁部～縁部内面斜位のヘラミガキ、口縁部外面横ナゲ後多方向のヘラミガキ、底部外面横ナゲ	2区覆土中	5% PL14
6	土師器	器台	—	(4.3)	—	長石、石英、角閃石、チャート	褐色	内面ヘラミガキ、器部内面ヘラナゲ、外面縦位のヘラミガキ、穿孔2ヶ所残存	4区覆土中	5% PL14
7	土師器	器台	—	(5.7)	—	長石、石英、白	褐色	内面ヘラナゲ後了單ナゲ、器部内面横位のヘラナゲ(工具残存)、外面ヘラミガキ、穿孔3ヶ所	1区覆土中	5% PL14
8	土師器	S字状 口縁 台付樂	—	3.5	—	石英、白色粒子、赤色粒子	緑灰色	口縁部内外面ナゲ、内面下部指頭痕、外面縦位のヘラ目(7本/単位)	2区覆土中	5% PL14
9	土師器	甕	—	(2.3)	—	長石、石英、角閃石	にぶい 黄褐色	口縁部内外面横ナゲ(外面注離1条)、器部内面指頭痕	2区覆土中	5% PL14
10	土師器	S字状 口縁 台付樂	(14.8)	(1.9)	—	長石、石英、白	にぶい 褐色	口縁部内外面横ナゲ、器部内面横位のナゲ、外面ハケ目(7～10本/単位)	1区覆土中	5% PL14
11	土師器	S字状 口縁 台付樂	—	(2.0)	—	長石、石英、角閃石	黒褐色	内外面横ナゲ(内面下部ナゲ)	2区覆土中	5% PL14
12	土師器	S字状 口縁 台付樂	(16.6)	(2.8)	—	長石、石英、角閃石	にぶい 黄褐色	口縁部内外面横ナゲ、内面下部ナゲ・指頭痕、外面下部縦位のハケ目(8本/単位)	4区覆土中	5% PL14
13	土師器	台付樂	—	(4.7)	6.8	長石、石英、チャート	にぶい 黄褐色	内面ナゲ、器部内面縦位のナゲ・指頭痕、外面縦位のハケ目(6本/単位)、外面下部～縁部ナゲ	貯蔵穴	10% PL14
14	土師器	台付樂	—	(4.9)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	褐色	内面ナゲ、器部内面ナゲ、外面ナゲ後斜位のハケ目(6～8本/単位)	3区覆土中	10% PL14
15	土師器	台付樂	—	(3.9)	—	長石、石英、角閃石、赤色粒子	にぶい 褐色	夏込みナゲ、器部内面ナゲ・指頭痕、外面ナゲ後斜位のハケ目(8本/単位)	4区覆土中	5% PL14
16	土師器	甕	—	(1.7)	4.3	長石、石英、角閃石、白色粒子	灰黄褐色	内面ヘラナゲ、外面縦位のヘラナゲ、底部ヘラ削り	4区覆土中	5% PL14
番号	跡種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特徴		出土位置	備考
17	石器 (磁石)	14.1	5.9	2.5	235	砂岩	敲打面1面、その他は自然面		貯蔵穴	PL14
18	石器 (磁石)	11.0	9.1	5.1	644	凝灰岩	砥面2面、磨擦性が高い		3区覆土中	PL14

第 11 号竪穴建物跡 (S11) (第 26・27 図, 表 13)

位置 第 1 調査区 K8・K9・L8・L9 グリッド, 標高 58.50m 地点に位置する。

規模と形状 本跡の東 3 分の 1 程度が調査区外にあり, また, 削平を受けているため遺構プランが不明瞭である。調査できた範囲での規模は長軸 5.10m, 短軸 3.62m であって, 長方形を基調としたプランが想定される。削平により床面が失われているため, 壁は不明である。掘方は外傾して立ち上がっている。

重複関係 第 10～12 号ピットに掘り込まれている。

土層 削平により床面が失われているため, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 10YR 3/4 暗褐色: 径 1～3mm 大のロームブロック多量 褐色粒子少量 白色粒少量 粘性あり 締まり強い (粘沫構造土)

床 削平により失われている。

壁溝 検出されていない。

炉 中央部南西寄りに設けられている。南西部の一部が擾乱により壊されている。長径74cm、短径65cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは最大6cmである。炉底はほぼ平坦で、被熱による硬化は希薄である。炉の中央やや南西寄りの位置で、被熱した痕跡のある棒状の炉石が炉底より浮いた状態で出土した。炉石は北東—南西方向に置かれている。出土状況から、炉石は置きなおしたものと考えられる。また、炉の北東部で石皿状の扁平な石1点が一部を炉底に接して出土した。

土層解説

I 7.5YR 5/1 褐色土： 径1～2cm大のロームブロック少量 焼土粒子微量 粘性あり 締まりやや強い
貯蔵穴 検出されていない。

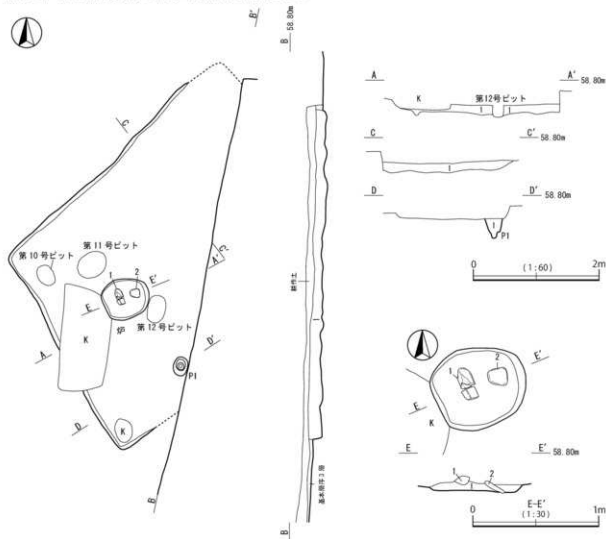
柱穴 1ヶ所確認された。主柱穴となりうるかは不明である。規模は、P1：30cm×22cm、深さ22cmである。

土層解説

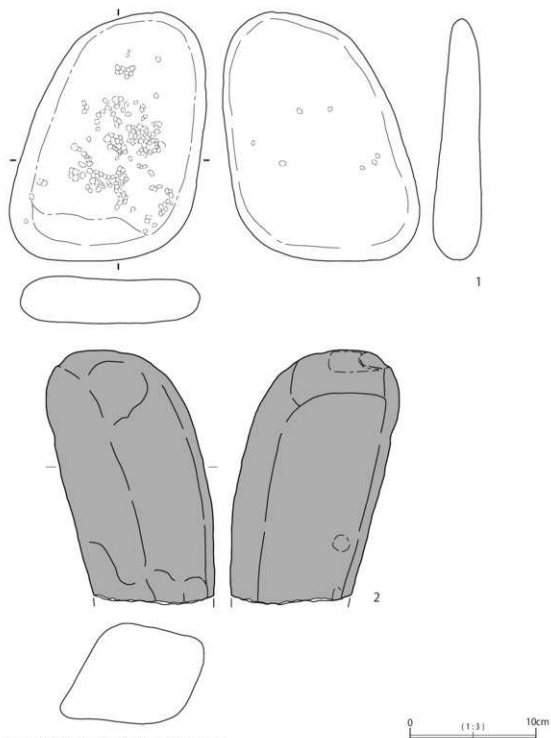
I 7.5YR 5/1 褐色土： ローム粒子少量 粘性あり 締まりやや弱い

遺物出土状況 石器2点。I・2は、共に炉から出土した。このほかの遺物は出土しなかった。

所見 本跡の3分の1程度が調査区に延びており、また、削平を受けていることから、遺構プランが不明瞭である。遺物も出土しなかったため、十分な情報を得ることができなかった。枕石の置かれている方向から、出入口は南西側もしくは北東側にあったものと推測される。主柱穴が1か所、形状が長方形と推測される等、他の住居との相違点大きい。遺物が出土していないため、時期を確定することは困難だが、炉に炉石を伴う点から、弥生時代後期から古墳時代前期と推測される。



第26図 第11号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60)



第 27 図 第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/3)

表 13 第 11 号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	図種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	出土位置	備考
1	石器 (石皿)	19.7	16.4	3.6	1732	砂岩 ⁺	磨・敲打面 ⁺ 面。他は自然面 ⁺	S ⁺ 内	Pl.14
2	石器 (石 ⁺ 石)	(20.2)	13.4	8.0	2500	砂岩 ⁺	全体的に被熱 ⁺ 、一部煤付着	S ⁺ 内	Pl.14

第12号竪穴建物跡(S12)(第28～30図,表14)

位置 第1調査区G13・G14・H14グリッド,標高58.70m地点に位置する。

規模と形状 本跡の南部大半が調査区外に伸びている。調査できた範囲での規模は,長軸(5.10)m,短軸8.14mであり,隅丸方もしくは隅丸長方形を基調としたプランが想定される。主軸方向はN-7°-Eである。壁は確認面から最大高27cmで,やや外傾して立ち上がっている。

重複関係 単独で位置する。

土層 ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: 径1～2cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 白色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 2/3 黒褐色: 径0.5～1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 4/3 赤い-黄褐色: 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 粘性あり 締まり強い (貯蔵構築土)
- 4 10YR 3/3 暗褐色: 径1～3cm大のロームブロック多量 ローム粒子多量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりやや強い (貯蔵構築土)

床 ほぼ平坦で,中央部が硬化している。

壁溝 検出されなかった。

炉 南壁中央やや東寄りに設けられている。長径52cm,短径46cmの楕円形を呈し,床面からの深さは最大6cmである。炉底はやや凹凸があり,被熱による硬化は希薄である。炉の中央部で,わずかに被熱した痕跡のある棒状の枕石が3つに割れた状態で出土した。炉石は,ほぼ床面の高さ,炉底より浮いた状態で東西方向に置かれて出土した。出土状況から,炉石は置きなおしたものと考えられる。

土層解説

- 1 7.5YR 4/2 灰褐色: 径1～3cmのロームブロック少量 ローム粒子復旧に少量 焼土粒子復旧に少量 粘性あり 締まりやや強い
- 2 7.5YR 3/4 暗褐色: ローム粒子多量 焼土粒子少量 粘性やや強い 締まりやや強い

貯蔵穴 北壁際,東寄りの位置で,貯蔵穴の可能性のある土坑1基を検出した。南部の一部が調査区外に伸びている。調査できた範囲において,形状は長径103cm,短径106cmの楕円形で,断面は上端がやや開く逆台形状を呈すると推測される。確認面からの深さは最大48cmであり,底面はほぼ平坦である。

土層解説

- 1 10YR 2/2 黒褐色: ローム粒子復旧に少量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR 3/3 暗褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 棕色粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 5/3 赤い-黄褐色: 径1～3cmのロームブロック多量 ローム粒子多量 黒褐色ブロック少量 粘性やや強い 締まり強い

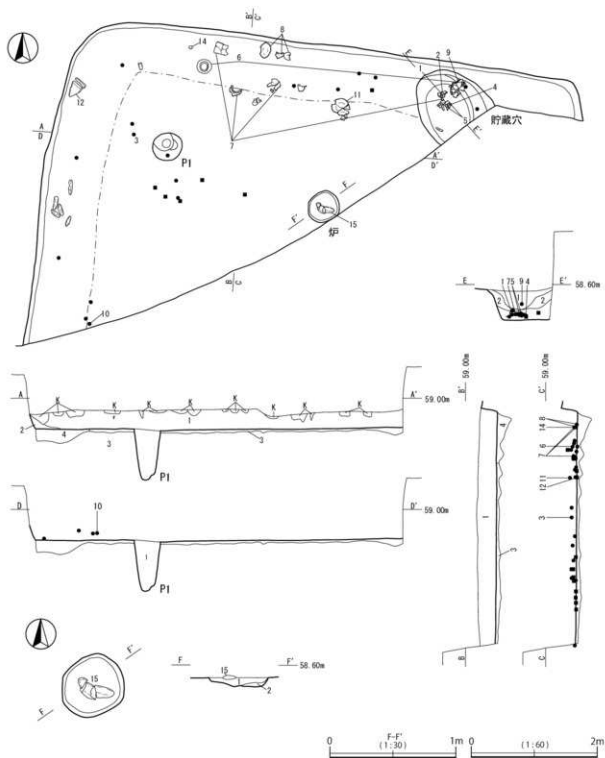
柱穴 1ヶ所確認され,主柱穴と考えられる。規模は,P1:46cm×43cm,深さ80cmである。

土層解説

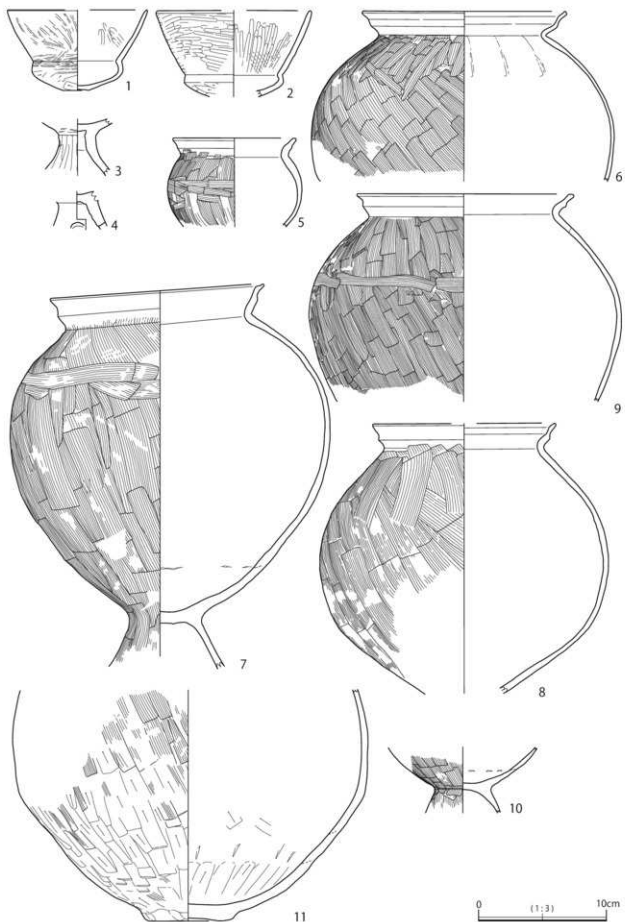
- 1 10YR 3/2 黒褐色: 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子多量 白色粒子微量 粘性やや強い 締まりあり

遺物出土状況 土師器片(椀4点,埴7点,器台・高坏類4点,壺・台付甕・甕類441点),縄文土器片5点,石器4点,石製品1点。15は炉石であり,全体が被熱している。16は覆土中から出土した。8・12・14は床面直上,1・2・4・5・9は貯蔵穴から出土した。6・7は,床面直上と貯蔵穴からの出土したものが接合した。

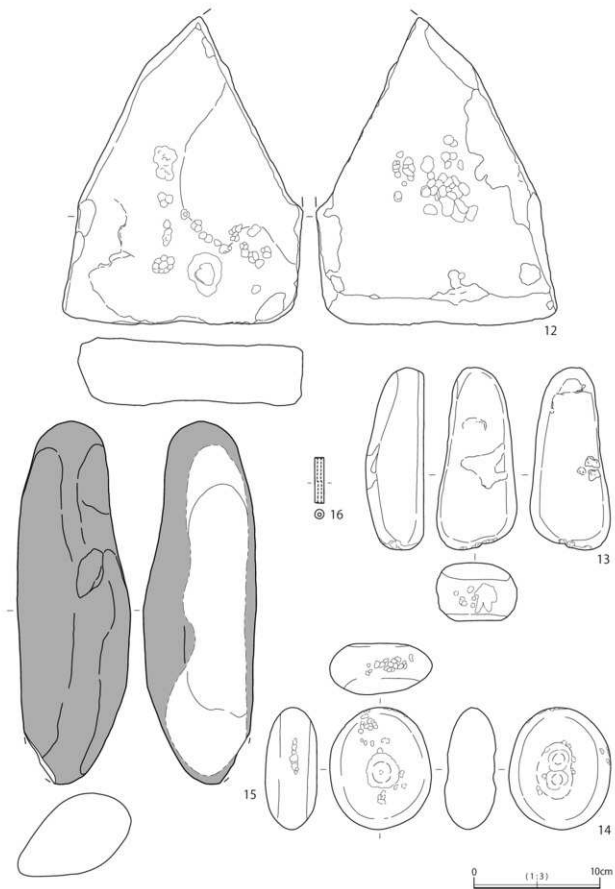
所見 上層がトレンチャーによる擾乱を受けているが,遺構の遺存状態は比較的良好である。南部の大半が調査区外に伸びており,未調査部分は大きい。当遺跡の竪穴建物跡の中で,規模が最大である。炉石の置かれている方向から,出入口は南側にあったものと推測される。時期は,出土遺物から古墳時代前期である。



第 28 图 第 12 号竖穴建物跡実測图 (1/30 · 1/60)



第29图 第12号竖穴建物出土遺物跡実測图①(1/3)



第30図 第12号竖穴建物出土遺物跡実測図②(1/3)

表 14 第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	土師器	埴	[10.8]	6.3	2.0	長石、石英、黄閃石、チャート、白色粒子	に高い黄褐色	口縁部内面横ナズ後縦位のヘラミガキ、外面斜位のヘラミガキ後ナズ。腹部外面横位のヘラミガキ、内部内面ナズ。外面横位のヘラミガキ後ナズ。底部ナズ	貯蔵穴	50% PL14
2	土師器	埴	[11.9]	6.3	—	長石、石英、チャート、赤色粒子	に高い黄褐色	口縁部部～口縁部内面上部縦位のヘラミガキ、下部斜位のハケ目後縦位のヘラミガキ、外面横位のヘラミガキ、内部内面ナズ。外面横位のヘラミガキ	貯蔵穴	15% PL15
3	土師器	高坏	—	(4.4)	—	長石、石英、黄閃石、チャート	に高い緑色	内面ナズ、臀部内面ナズ。外面縦位のヘラミガキ(一部工具痕あり)	礎土下層	20% PL15
4	土師器	高坏	—	(2.9)	—	長石、石英、黄閃石、白色粒子	浅黄褐色	内面ナズ、臀部内外面ナズ。穿孔2ヶ所残存(全部で3ヶ所)	貯蔵穴	20% PL15
5	土師器	小型口縁台付埴	[9.8]	6.9	—	長石、石英、黄閃石、白色粒子	浅黄褐色	口縁部～頸部横ナズ。内部内面上部ヘラミガキ後ナズ。下部ナズ。外面縦位のハケ目9～13本/単位(後縦位のハケ目4～5本/単位)	貯蔵穴	20% PL15
6	土師器	S字状口縁台付埴	15.8	(13.3)	—	長石、石英、黄閃石	黒褐色	口縁部～頸部内面横ナズ。内部内面横位のナズ(上部縦位のヘラミガキ)。外面斜位のハケ目(多方向6～10本/単位)。外面保付者	床面直上貯蔵穴	50% PL15
7	土師器	S字状口縁台付埴	16.5	(20.0)	—	長石、石英、黄閃石	黒褐色	口縁部内外面横ナズ。外部～頸部外面縦位のハケ目(12～14本/単位)。内部内面工具ナズ下部位未残。臀部内面ナズ	床面直上貯蔵穴	50% PL15
8	土師器	S字状台付埴	[14.0]	(21.1)	—	長石、石英、黄閃石、チャート	浅黄褐色	口縁部～頸部内外面横ナズ。内部内面調整工用器(工具調整後ナズ)。外部外面上部斜位後縦位のハケ目。下部縦位・斜位のハケ目(10～13本/単位)	床面直上貯蔵穴	40% PL15
9	土師器	S字状口縁台付埴	16.8	(16.2)	—	長石、石英、黄閃石、白色粒子	暗赤褐色	口縁部～頸部内外面横ナズ(外部外面縦位のハケ目残存)。腹部内面横位のヘラミガキ。内部内面ナズ(上部ヘラミガキ後ナズ)。外面縦位のハケ目(11本/単位)外部側部縦位のハケ目(9～14本/単位)。外面保付者	貯蔵穴	70% PL15
10	土師器	台付埴	—	(5.2)	—	長石、石英、チャート	明褐色	内部内面上部ヘラミガキ後ナズ。外面縦位のハケ目(8本/単位)。臀部内面ナズ。外面斜位のハケ目(9～10本/単位)	礎土下層	20% PL15
11	土師器	埴	—	(18.1)	5.8	長石、石英、石英、チャート	に高い緑色	内部内面上部ヘラミガキ後ナズ(一部工具痕)。下部ヘラミガキ(下部調整痕)。外面縦位のハケ目・縦位のヘラミガキ後ナズ。内部ナズ。内面無ヘラミガキ。外面保付者	礎土下層	40% PL15

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴	出土位置	備考
12	石器 (石玉)	(24.3)	19.0	5.4	3450	砂岩	使用面凹面。研磨面凹面	床面直上	PL16
13	石器 (燧石)	14.5	6.4	4.6	653	砂岩か	縦打面凹面。その他は自然面か	1区履土中	PL16
14	石器 (燧石)	9.7	8.1	4.1	436	安山岩か	表裏凹穴。その他は自然面	床面直上	PL16
15	石器 (燧石)	28.8	9.0	6.6	2300	斑状砂岩か	全体的に被熱	貯内	PL16

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	口径 (cm)	重量 (g)	石質	特徴	出土位置	備考
16	石製品 (管玉)	3.6	0.8	0.3	3	碧玉	両方向から穿孔	1区履土中	PL16

(2) ビット (P 4・7)

ビット2基が確認できた。SP 4, SP 7が、それぞれ第6号竪穴建物跡、第4号竪穴建物跡に掘り込まれているため、古墳時代前期以前の遺構であると考えられる。出土遺物はなかった。

第4号ビット (P 4) (第31図, 表15)

位置 第1調査区 K5 グリッド, 標高 57.60m 地点に位置する。

規模と形状 規模は、径 40cm×38cm, 深さ 21cmで、壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

重複関係 第6号竪穴建物跡に掘り込まれている。

土層 ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YK3/2 黒褐色土 径1cm大のロームブロック少量 白色粒子少量 粘性や弱い 締り弱い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、重複関係から古墳時代前期以前と考えられる。

第7号ピット (P7) (第35図, 表15)

位置 第1調査区J9グリッド, 標高57.60m地点に位置する。

規模と形状 規模は、径41cm×40cm, 深さ20cmで、壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

重複関係 第4号竪穴建物跡に掘り込まれている。

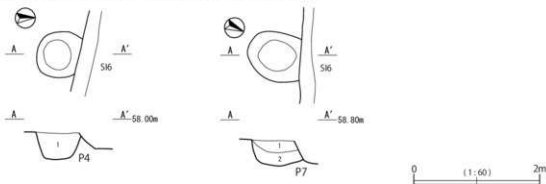
土層 ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム粒子微量 棕色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 径1cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 粘性あり 締まりやや強い

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 時期は、重複関係から古墳時代前期以前と考えられる。



第31図 古墳時代のピット実測図(1/60)

表15 古墳時代前期以前のピット

番号	位置	平面形	規模 (cm)			壁面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・重複関係)
			長軸	短軸	深さ				
P4	K5	円形	40	38	21	外傾	人為	—	古墳時代前期以前 本跡→S16
P7	J9	円形	41	40	20	外傾	人為	—	古墳時代前期以前 本跡→S14

2 平安時代

(1) 竪穴建物跡

9世紀後半に比定される竪穴建物跡を、第1調査区で1棟確認した。

第1号竪穴建物跡 (S11) (第32・33図, 表16・17)

位置 第1調査区J3・K3グリッド, 標高57.60m地点に位置する。

規模と形状 長軸5.54m, 短軸3.88mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-36°-W(短軸)である。壁は確認面から最大高51cmで、外傾して立ち上がっている。

重複関係 北東部で第1号性格不明遺構に掘り込まれている。南東部は第6号竪穴建物跡を掘り込んでいた可能性がある。

土層 ロームブロック主体の人為的な堆積状況を示している。

土層解説

- 1 10YR 3/2 黒褐色： ロームブロック微量 ローム粒子斑状に多量 粘性あり 締まりやや弱い
- 2 10YR 3/3 暗褐色： ローム粒子斑状に多量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 3/2 黒褐色： ロームブロック少量 ローム粒子斑状に多量 赤褐色粒子微量 粘性あり 締まりあり
- 4 10YR 3/3 暗褐色： ローム粒子斑状に少量 粘性あり 締まりあり
- 5 10YR 3/4 暗褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子斑状に多量 粘性あり 締まりやや強い（灰床構築土）
- 6 10YR 4/4 褐色： ローム粒子斑状に少量 粘性あり 締まりやや強い 灰床
- 7 10YR 4/3 にぶ・黄褐色： 径0.5～1cm大のロームブロック少量 ローム粒子微量 粘性やや強い 締まり強い（灰床構築土）
- 8 10YR 4/3 にぶ・黄褐色： 径0.5～1cm大のロームブロック多量 ローム粒子少量 暗褐色ブロック少量 粘性あり 締まり強い（灰床構築土）
- 9 10YR 3/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 粘性あり 締まりあり（P4・P6 覆土）

床 おおむね平坦だが、北東部で凹凸がある。

壁溝 検出されていない。

竈 北壁際、北角近くで微量の焼土粒子・炭化物を検出したため、焼土粒子の広がる範囲を半載して竈の有無を確認したが、粘土や被熱した痕跡は確認できなかった。

土層解説

- 1 10YR 4/3 にぶ・黄褐色： ローム粒子微量 黒褐色ブロック微量 焼土粒子少量 炭化物極微量 粘性あり 締まりあり

柱穴 15ヶ所確認したが、ピットの配置に規則性が認められず、その性格・用途は不明である。規格は、P1：27cm×23cm、深さ15cm、P2：26cm×25cm、深さ21cm、P3：27cm×(25)cm、深さ24cm、P4：17cm×15cm、深さ17cm、P5：26cm×26cm、深さ22cm、P6：32cm×25cm、深さ23cm、P7：22cm×18cm、深さ53cm、P8：17cm×14cm、深さ22cm、P9：19cm×17cm、深さ26cm、P10：28cm×23cm、深さ40cm、P11：20cm×20cm、深さ33cm、P12：22cm×19cm、深さ27cm、P13：26cm×23cm、深さ20cm、P14：18cm×16cm、深さ13cm、P15：27cm×23cm、深さ16cmである。

土層解説

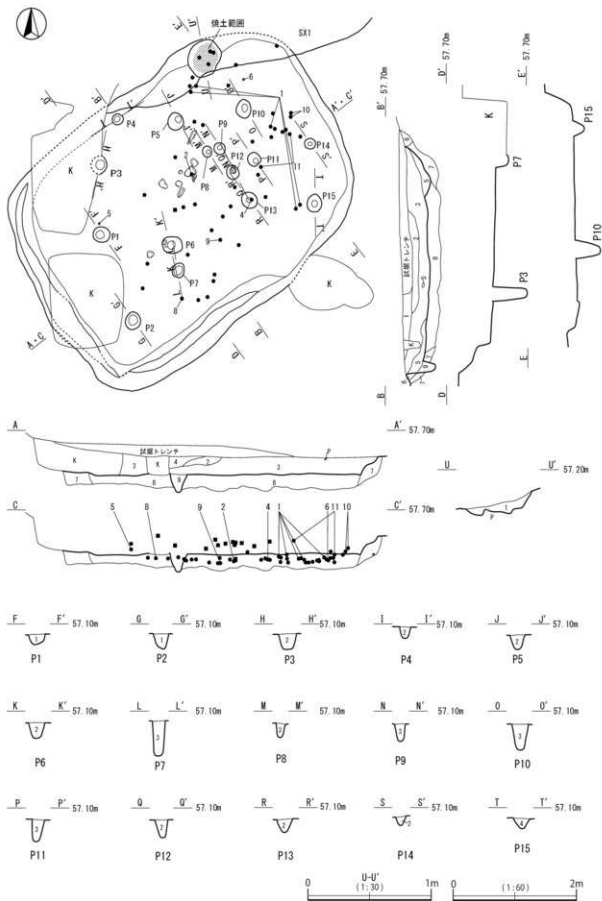
- 1 10YR 3/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック少量 ローム粒子少量 黒褐色ブロック多量 粘性あり 締まりあり（住居跡第9層）
- 2 10YR 3/3 暗褐色： 径1cm大のロームブロック微量 ローム粒子少量 粘性あり 締まりあり
- 3 10YR 2/3 黒褐色： ローム粒子多量 粘性あり 締まりやや強い
- 4 10YR 4/6 褐色： ローム粒子微量 粘性あり 締まりやや強い

遺物出土状況 須恵器片（坏1点、甕9点）、土師器片（坏・皿類55点、甕類240点）、縄文土器（深鉢15点）、陶磁器片4点。陶磁器片等は概乱中からの出土遺物である。黒書土器を含む遺物多数が掘方から出土した。12は覆土に混入した遺物である。1・2・4・6・8・9は、掘方から出土した。

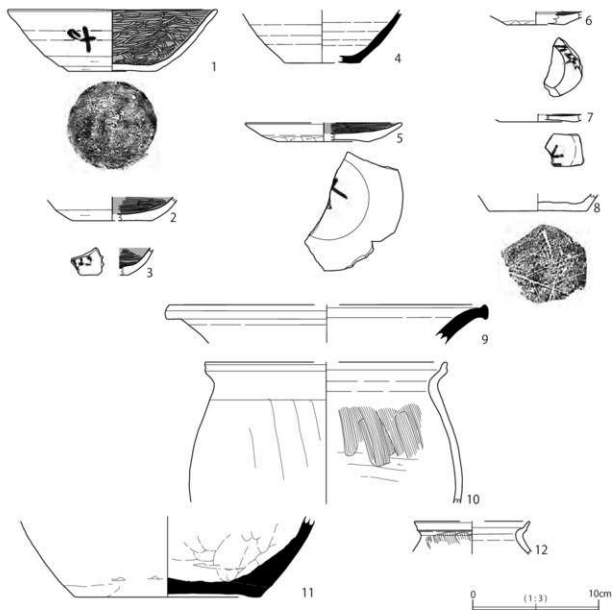
所見 遺構の掘削時、床面を明確に把握できず、掘方を若干掘削してしまい、一部掘方出土の遺物と覆土出土の遺物が混ってしまうこととなった。中央部の床面から浮いた位置で、10～20cm程度の大きさの礫12個が出土したが、埋め戻し時に投棄あるいは混入したものであって、遺構に伴う遺物ではないと推測される。遺構の形状から何らかの工房であった可能性もあるが、何などの燃焼施設や鉄滓等の工房遺構に特有の遺物の出土が見られなかったことから詳細は不明である。時期は、出土遺物から9世紀後半である。

表16 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表①

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	粘土	色調	手法の特徴①②	出土位置	備考
1	土師器	坏	16.4	4.9	7.0	長石、石英、雲母、赤色粒子、スズア	に高い褐色	内面ヘラとガキ、外面はクロナダ下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り	1区覆土中 掘方	黒書「4」 底部ヘラ削り 70% P.16
2	土師器	坏	—	(1.9)	(6.4)	長石、石英、雲母	に高い黄褐色	内面黒色処理、内面ヘラとガキ、外面ナデ・回転ヘラ削り、底部ヘラ削り後回転ヘラ削り	掘方	10% P.16
3	土師器	坏	—	(2.2)	—	長石、石英、雲母	に高い黄褐色	内面黒色処理、内面ヘラとガキ、外面はクロナダ下端ヘラ削り、底部回転ヘラ削り後ナデ	2区覆土中	黒書「C」 5% P.16
4	須恵器	坏	—	(4.2)	(6.0)	長石、石英、針状炭化物	灰黑色	内面外面クロナダ、底部ヘラ削り後ナデ	1区覆土中 掘方	30% P.16 木葉下箔
5	土師器	皿	(12.2)	1.5	(7.2)	長石、石英、雲母、スズア	に高い黄褐色	内面黒色処理、内面磯波のヘラとガキ、見込み一方向のヘラとガキ、外面はクロナダ下端手持ちヘラ削り、底部ヘラ削り後回転ヘラ削り	掘方下層	黒書「C」 20% P.17



第32図 第1号竪穴建物跡実測図(1/30・1/60)



第33図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/3)

表17 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表②

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	土師器	皿	—	(1.1)	(3.6)	長石、石英、 雲母	に高い 棕色	内面黒色処理、内面へラミガキ、外面コロナダで 塚手持ちへラ削り、底部一方向のへラ削り	竪方	墨影印)9 10% PL17
7	土師器	皿	—	(0.6)	(6.0)	長石、石英	に高い 黄棕色	内面黒色処理、内面へラミガキ、底部へラ切り後内 面へラ削り	25区覆土中	墨影印)1 5% PL17
8	土師器	甕	—	(1.4)	(7.8)	長石、石英	に高い 赤褐色	内面ナダ、外面へラ削り方、底部本葉痕	竪方	10% PL17
9	須恵器	甕	(24.0)	(3.1)	—	長石、石英、針 状鉱物	灰色	内外面コロナダ	竪方	5% PL17 木葉下葉
10	土師器	甕	(19.0)	(11.2)	—	長石、石英	に高い 棕色	口縁部～頸部内外面横ナダ、体部内面縦位のハケ目 下部横位のナダ、外面縦位のナダ	覆土下層 11区覆土中	20% PL17
11	須恵器	甕	—	(6.4)	14.8	長石、石英、 黒色吹き出し	灰色	内面指懸痕、外面縦位のナダ、底部ナダ	覆土上層 伏面直上	20% PL17
12	土師器	S字紋 口縁部 付付箋	(9.0)	(2.6)	—	長石、石英、赤 色粘土	灰黄褐色	口縁部～頸部内外面横ナダ、体部外面縦位のハケ目	25区覆土中	10% PL17

3 中世

(1) 性格不明遺構

第1調査区北部で1基確認された。

第1号性格不明遺構 (SX1) (第34・35図, 表18)

位置 第1調査区H2・I2・I3・J2・J3・K2・K3グリッド, 標高57.20～57.90m地点にある。

規模・形状 確認できた部分での全長約13.9m, 幅は最大2m, 確認面からの深さは最大78cmである。底面は北側および西側に向かって緩やかに傾斜している。壁は外傾して立ち上がり, 西部ではややオーバーハンダしている。

重複関係 南東部で第1号住居跡を掘り込んでいる。

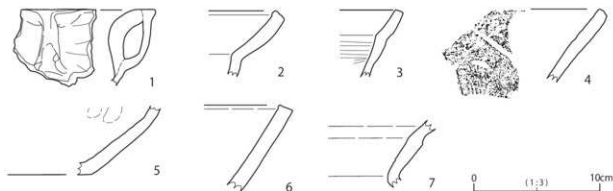
土層 第2層・第3層が埋め戻しによる人為的な堆積, 第1層が自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 10YR 2/1 黒色 ローム粒子微層 白色粒子微層 粘性強, 締まりやや強い
- 2 10YR 2/1 黒色 径0.5cm大のロームブロック微層 ローム粒子多量 粘性強, 締まりやや強い
- 3 10YR 3/1 黒褐色 径0.5cm大のロームブロック微層 ローム粒子多量 粘性やや弱い, 締まりあり

遺物出土状況 土師質土器片(内耳鍋3点, 甕類1点), 瓦質土器(掃鉢1点, 甕類1点), 陶磁器片15点, 土師器片(杯・皿類4点, 壺1点, 台付甕・甕類133点), 須恵器片(甕類6点), 縄文土器片2点, 金属製品8点。金属製品・陶磁器のうち近世以降のものは複乱からの出土遺物である。

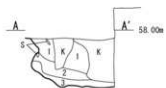
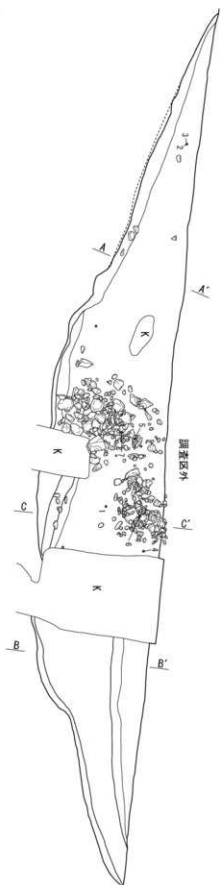
所見 遺構中央部から5～25cm大の自然礫が多数出土したが, 遺構の傾斜に従って出土しているため, 埋没過程で一括して投棄されたものと考えられる。本跡の調査は一部にとどまったため, 性格不明遺構としたが, 形状から段切状遺構の可能性が高い。時期は, 出土遺物から14～15世紀以降と考えられる。



第34図 第1号性格不明遺構出土遺物実測図(1/3)

表18 第1号性格不明遺構出土遺物観察

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	内耳鍋	—	6.0	—	石英, 金雲母, 雲母, チャート	褐色	口唇部横ナズ, 内面ナズ一部削りか, 外面ナズ	覆土上層	10% PL17
2	土師質土器	内耳鍋	—	5.2	—	長石, 雲母, 白色粒子, チャート	黒褐色	内外面横ナズ	覆土中層	5% PL17
3	土師質土器	内耳鍋	—	5.3	—	長石, 石英, 角閃石, 雲母	灰褐色	内外面ロコナズ, 内面下部へケ目(5本/単位)横ナズ	覆土中層	5% PL17
4	瓦質土器	掃鉢	—	5.8	—	長石, 石英, 白に濃い黄色粒子	に濃い黄色色	全体的に調整剥落, 顔目5本以上	覆土中層	5% PL17
5	瓦質土器	壺	—	5.6	—	長石, 石英, 白に濃い黄色粒子	暗灰色	内面横位のナズ・指摺痕, 外面ナズ	覆土中層	5% PL17
6	陶器	鉢	—	6.8	—	石英, 白色粒子, 鉄分吹出し	に濃い赤褐色	口縁部内外面上部横ナズ, 下部ナズ	覆土中層	5% PL17 埋没産
7	陶器	壺	—	5.3	—	長石, 石英, 白色粒子	暗灰色	内外面ロコナズ	覆土上層	5% PL17 埋没産



第 35 図 第 1 号性格不明遺構実測図 (1/60)

4 時期不明の遺構

土坑1基、ピット11基が確認できたが、時期は不確定である。概略と表で示した。

(1) 土坑

第1号土坑 (SK1) (第37図, 表21)

第1調査区中央部で確認でき、長径99cm、短径71cmの不正楕円形で、確認面からの深さは最大18cmである。遺物の出土がなかったため、時期は不明である。

表19 時期不明の土坑

番号	位置	平面形	規模 (cm)			壁面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・重複関係)
			長軸	短軸	深さ				
SK1	J7	不整形	99	71	18	外傾	人為	—	時期不明

(2) ピット (P1～3・5・6・8～13) (第36・37図, 表20・21)

ピット11基が確認できた。このうち、遺物の出土があったのは、P1, P13の2基のみである。ただし、P1・P13ともに竪穴建物跡を掘り込んでおり、出土遺物は竪穴建物跡に伴う遺物の混入である可能性が高いため、時期は明確ではない。これら以外のピットについては、時期は不明である。

遺物1はP13の覆土中から出土した。第3号竪穴建物跡に帰属する遺物である可能性が高い。



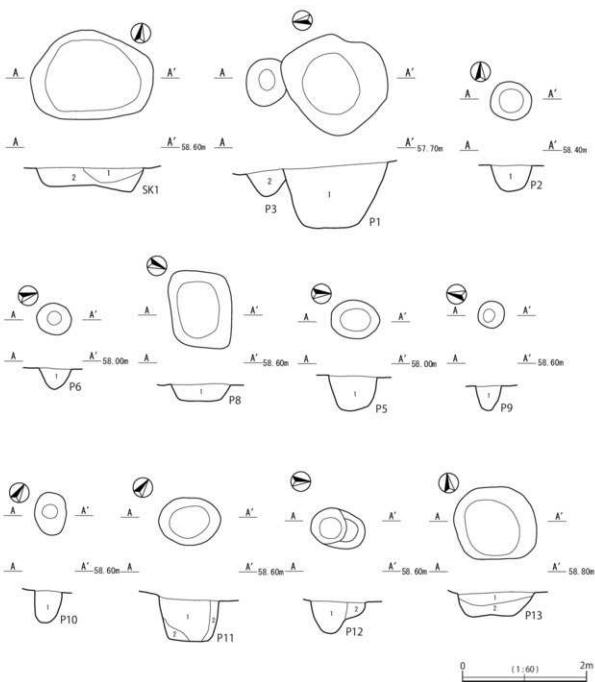
第36図 第13号ピット出土遺物実測図 (1/3)

表20 第13号ピット出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	手法の特徴(口)	出土位置	備考
1	土師器	S字状白磁土付蓋	—	(5.4)	—	長石、白色胎土	黒褐色	口縁部～体部上部内面ナデ、口縁部外面ナデ、体部内面ナデ、外面底位のハケ目(5～8本/單位)	覆土中	3% P1.18

表21 時期不明のピット

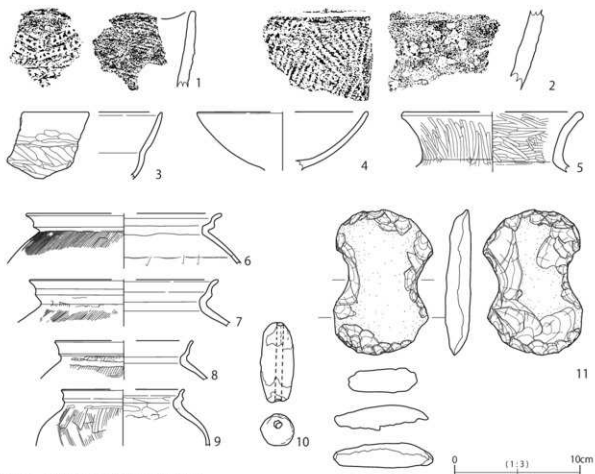
番号	位置	平面形	規模 (cm)			壁面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・重複関係)
			長軸	短軸	深さ				
P1	L4	不整形	79	77	41	外傾	人為	土師器片	時期不明 S16→本跡
P2	K7	円形	33	31	21	外傾	人為	—	時期不明
P3	L4	円形	40	35	22	外傾	自然	—	時期不明 S16→本跡
P5	L5	楕円形	38	31	28	外傾	自然	—	時期不明
P6	L6	円形	29	24	19	外傾	自然	—	時期不明
P8	K7	方形	56	49	12	外傾	人為	—	時期不明
P9	J7	円形	22	21	19	外傾	自然	—	時期不明 S12→本跡
P10	K9	楕円形	34	25	27	外傾	人為	—	時期不明 S111→本跡
P11	K9	楕円形	49	38	37	外傾	人為	—	時期不明 S111→本跡
P12	L9	楕円形	44	30	39	外傾	人為	—	時期不明 S111→本跡
P13	J13	円形	66	59	21	外傾	自然	土師器片	時期不明 S13→本跡



第 37 図 時期不明の土坑・ピット実測図 (1/60)

5 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものについて拓影・実測図を掲載する。(第 38 図、表 22)



第38図 遺構外出土遺物実測図(1/3)

表22 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	部種	口径 (cm)	部高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色裏	手法的特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	—	長石、白色粒子	黒褐色	板状口縁。卑部粗織文を斜位に施す。内面・口縁部外面上端ナデ	S14 覆土中	5% PL18
2	縄文土器	深鉢	—	(6.4)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	褐色	上端に横状区画文。全面に卑部粗織文を縦位・斜位に施す。内面ナデ部分的に剥離	S13 覆土中	5% PL18
3	土師器	埴	—	(5.3)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	に広い黄褐色	口縁部内面・外面上端横ナデ。体部内面ナデ。口縁部～体部外面へラミガキ	表探	5% PL18
4	土師器	高杯	(13.4)	(4.7)	—	長石、石英、角閃石	明褐色	口唇部横ナデ。内外面ナデ	表土	20% PL18
5	土師器	蓋	(14.0)	(4.8)	—	長石、石英、白色粒子、赤色粒子	に広い褐色	口唇部横ナデ。口縁部内面横ナデ後多方向のへラミガキ。外面横ナデ後縦位の粗いへラミガキ。頭部内面ナデ	表土	5% PL18
6	土師器	S字状白線付台盤	(15.4)	(4.0)	—	長石、石英	に広い黄褐色	口縁部内外面横ナデ。頭部～体部内面へラミガキナデ。体部外面縦位のハケ目(3本/単位)	表土	10% PL18
7	土師器	S字状白線付台盤	(14.8)	(3.7)	—	長石、石英、角閃石、白色粒子	に広い褐色	口縁部内外面横ナデ。頭部内面縦位のへラミガキ。外面斜位のハケ目後ナデ。体部内面縦位のナデ。外面斜位のハケ目(8～10本/単位)。内外面黒染	表土	10% PL18
8	土師器	S字状白線付台盤	(10.8)	(3.1)	—	長石、石英、白色粒子、黒色粒子	黒褐色	口縁部内外面横ナデ。頭部外面斜位のハケ目後ナデ。頭部～体部内面縦位にラミガキ。体部外面斜位のハケ目(5本/単位)	表土	5% PL18
9	土師器	S字状白線付台盤	(9.6)	(4.5)	—	長石、石英、白色粒子	黒褐色	口縁部内外面横ナデ。体部内面ナデ・消線痕。外面縦位・斜位のハケ目(9本/単位)	表土	5% PL18
番号	部種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	特徴		出土位置	備考
10	土製品(管状土器)	6.4	2.7	0.5	44	長石、石英	手捏ね。全体的に剥離。1孔		表土	90% PL18
番号	部種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	特徴		出土位置	備考
11	石器(打製石斧)	11.6	7.9	2.9	247	安山岩	分銅型石斧。粗い素材		表探	PL18

第4章 総 括

内原遺跡では、竪穴建物跡12棟(古墳時代11棟、平安時代1棟)、不明遺構1基、土坑1基、ピット13基を確認した。

ここでは、古墳時代の建物跡の変遷を中心に各時代の概略を述べる。

1 古墳時代

竪穴建物跡11棟が確認できた。ただし、第7号竪穴建物跡については、古墳時代前期の遺構と推測されるが、出土遺物が少ないため、他の建物跡との先後関係を明確にするのは困難である。また、第11号竪穴建物跡については、炉石を伴う建物跡であることから、時期は弥生時代後期～古墳時代前期の範疇に含まれるが、それ以上は明確ではない。

建物跡は概ね以下の3期に区分することができる。

(1) 建物跡の変遷

I期

第2号・第4号・第5号・第9号竪穴建物跡の4棟の建物で構成される。建物の規模は、他の時期の建物跡と比較すると一辺が6m未満と小さく、特に第9号竪穴建物跡は一辺が4.8mで当遺跡の最小規模である。

建物の主軸方向は第2号・第4号・第5号竪穴建物跡が真北軸からやや西に振れており、第9号竪穴建物跡はほぼ真北軸上にある。建物の構造は共通しており、主柱穴4か所と貯蔵穴を持ち、貯蔵穴すぐ近くに入出口ピットが穿たれている。また、建物の中央やや北寄りの位置に炬を設けているが、いずれも被熱した痕跡は希薄である。第4号竪穴建物跡のみ炬に炉石を伴う。

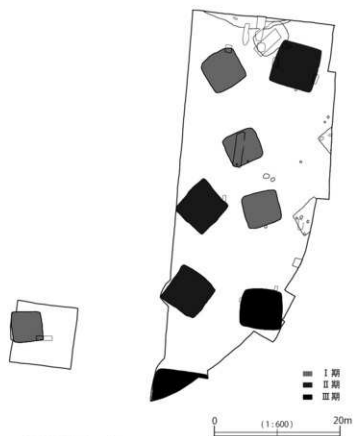
出土遺物については、第4号竪穴建物跡を中心に述べる。器種構成は、S字状口縁台付甕のほか、土師器椀・埴・器台・高環・壺・甕などである。ただし、第9号竪穴建物跡では埴・器台・高環は出土しなかった。S字状口縁台付甕は外面に横ハネのあるものとなないものがあり、体部の形状は肩が張るものと球状のものが混在する。口縁部は、外反しかつ屈曲部が明瞭であるものが多いが、屈曲部がはっきりしないものも含まれる。また、台部端部の折り返しがⅡ期以降ほど明瞭ではない。埴は口縁部が比較的短いものが主体である。第4号竪穴建物跡からは、十王台2b式の広口壺をはじめとして弥生土器数点が出土している。

時期としては、第4号竪穴建物跡が十王台式土器との共存関係から4世紀前半～中葉に比定され、その他の建物跡もほぼ同時期と考えたい。

Ⅱ期

第6号・第8号・第10号竪穴建物跡の3棟の建物で構成される。建物はⅠ期より大型化し、一辺が6～7mとなっている。主軸方向は、第8号・第10号竪穴建物跡が西に45～50度振れており、第6号竪穴建物跡はやや東に振れている。建物の構造はⅠ期と同様であるが、いずれの建物跡でも炬は明確には確認できなかった。ただし、第8号・第10号竪穴建物跡では炉石と思われる石が出土しているため、本来は炉石を伴う炬が存在していたものと思われる。第6号竪穴建物跡のみ壁溝を伴う。

第8号・第10号竪穴建物跡の出土遺物の大部分がトレンチャーによる掘乱からの出土であり、第6号竪穴建物跡は削平を受けているため当該期の出土遺物は乏しい。遺物について明確に述べることはできないが、基本的な器種構成はⅠ期と変わらないと思われる。また、埴の口縁部がⅠ期に比べるとやや長くなる傾向が見られるが、S字状口縁台付甕の特徴はⅠ期と変わりはない。



第 39 図 古墳時代集落の変遷 (1/600)

Ⅲ期

第 3 号・第 12 号竪穴建物跡の 2 棟の建物で構成される。建物の規模は、第 3 号竪穴建物跡がⅡ期と同規模であるほか、第 12 号竪穴建物跡は一辺 8 m 以上であり、当遺跡最大規模である。主軸方向は、第 12 号竪穴建物跡がほぼ北軸にあるのに対し、第 3 号竪穴建物跡は出入口を東側に設け、主軸は西を指向している。建物の構造については、第 3 号竪穴建物跡は補助柱穴を伴い、第 12 号竪穴建物跡では貯蔵穴を北側に設けるなど、Ⅱ期以前との相違が目立つ。

出土遺物の器種構成はⅡ期以前と同様である。S 字状口縁台付甕は外面に横ハケのあるものとないものが混在するが、第 3 号竪穴建物跡では横ハケのないものが主体である。また、Ⅱ期以前と比較して、口縁部の屈曲部が明瞭でないものが増えてきている。埴は、口縁部が長く体部高が低いものが主体となる。

Ⅱ期・Ⅲ期について、時期を明確に区分することは困難である。後述の通り、当遺跡で出土した S 字状口縁台付甕の特徴は茨城 S 字段階Ⅲ段階を示し、Ⅳ段階のものは見られない。Ⅳ段階の消滅時期が 5 世紀とされるため、Ⅱ期・Ⅲ期は、4 世紀後半と考えられる。

(2) S 字状口縁台付甕について

本遺跡から出土した S 字状口縁台付甕について、赤塚次郎氏の提示した O～D 類の分類、および茨城県教育財団古墳時代研究班による茨城 S 字Ⅰ～Ⅳ段階の区分に基づき、特徴と共伴土器を簡略に述べる。

Ⅰ期

C 類・D 類が混在し、基本的には茨城 S 字Ⅲ段階の特徴を示すが、台部折り返しが明瞭でないものがある。また、口縁部屈曲部がはっきりしないものが少なからず混じる。土器の組成は、椀・埴・器台・高環・壺・台付甕・甕などである。十王台 2 b 式の広口壺などの弥生土器を共伴する。

II期

出土遺物は小片が多く、特徴をとらえるのが困難であるが、概ね茨城S字Ⅲ段階の特徴を示し、I期と大きな違いはないと思われる。ただし、第8号竪穴建物跡の6と第10号竪穴建物跡の9はそれぞれ端部と屈曲部に枕線が入るなど、C類の古段階を示している可能性がある。しかし、共にトレンチャーによる攪乱からの出土であるため、建物跡に伴うことが確定ではない。土器の組成はI期と同様であるが、埴の口縁部がやや長くなる。

III期

C類・D類が混在するが、D類が主体になりつつある。体部の形状などは茨城S字Ⅲ段階の特徴を示す。土器の組成は変わらないが、埴は明瞭に口縁部の伸長と体部高の低下が認められる。

2 平安時代

竪穴建物跡1棟が確認できた。形状は長方形を呈し、床及び壁に構築土を貼って形状を整えている。床面には多数のピットを設けているが、用途は不明である。また、墨書土器を含む多数の遺物が掘方から出土したことは注目される。墨書土器5点中、判読できたのは「斗」「仲」の2字のみである。9世紀後半と考えられる。

第3章でも指摘した通り、本跡は竈や炉を持たないため性格は不明であるが、工房跡の可能性もある。近隣の西高遺跡や山根遺跡では、9世紀代の竪穴建物跡が検出されており、何らかの関わりがあった可能性が想起される。

3 中世以降

段切り遺構の可能性のある不明遺構1基を確認した。時期は出土遺物から14～15世紀以降である。なお、表土や攪乱から近世の陶磁器片が少数出土したが、近世に比定される遺構は確認できなかった。

4 まとめ

今回の調査において最も注目されるのは、古墳時代の竪穴建物跡11棟中10棟からS字状口縁台付甕が出土した点であろう。茨城県におけるS字状口縁台付甕の出土状況について、茨城県教育財団古墳時代研究班の報告において、那珂川・久慈川流域では下流域に集中することが指摘されており、東海地方からの伝播は太平洋経由の海上ルートが示唆されている。当遺跡は、那珂川を遡上してくるS字状口縁台付甕の伝播ルートにおいて、那珂川中・下流域での拠点的位置にあった可能性がある。今後の那珂川中・下流域での調査・S字状口縁台付甕出土事例の蓄積に期待したい。

参考文献

- ・赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター
- ・小田和博ほか 2009 『西高遺跡 発掘調査報告書』 常陸大宮市教育委員会
- ・古墳時代研究班（集落グループ）1996 『茨城の「S字状口縁台付甕」について』 『研究ノート』 5号（冊）茨城県教育財団
- ・古墳時代研究班（集落グループ）1997 『茨城の「S字状口縁台付甕」について（2）』 『研究ノート』 6号（冊）茨城県教育財団
- ・古墳時代研究班（集落グループ）1998 『茨城の「S字状口縁台付甕」について（3）』 『研究ノート』 7号（冊）茨城県教育財団
- ・鈴木敏弘 1985 『那珂・久慈川の源流と「S字口縁」土器』 『大森信英先生還暦記念論文集 常陸国風土記と考古学』 徳山出版
- ・鈴木敏行 1998 『武田石高遺跡における十王台式土器の編年について—「十王台式」分析のための基礎的な作業』 『武田石高遺跡 百石器・縄文・弥生時代篇（第2分冊）』（冊）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- ・三輪幸幸ほか 2014 『山根遺跡』 常陸大宮市教育委員会

写 真 图 版



調査区遠景 (東から)



遺跡全景 (東から)



1区全景（東から）



2区全景（東から）



第2号竪穴建物跡 完掘状況（南より）



第2号竪穴建物跡 床面出土状況及び遺物出土状況



第2号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況（南より）



第3号竪穴建物跡 完掘状況（南より）



第3号竪穴建物跡 遺物出土状況（南より）



第3号竪穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況（西より）



第4号竪穴建物跡 完掘状況（南より）



第4号竪穴建物跡 遺物出土状況（南より）



第4号竖穴建物跡 遺物出土状況（西より）



第4号竖穴建物跡 遺物出土状況（西より）



第4号竖穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況（北より）



第4号竖穴建物跡 炉跡完掘状況（南より）



第5号竖穴建物跡 完掘状況（南より）



第6号竖穴建物跡 完掘状況（南より）



第6号竖穴建物跡 遺物出土状況（南より）



第6号竖穴建物跡 遺物出土状況（南より）



第6号竖穴建物跡 貯蔵穴遺物出土状況 (南より)



第7号竖穴建物跡 完掘状況 (南より)



第7号竖穴建物跡 遺物出土状況 (西より)



第8号竖穴建物跡 完掘状況 (南より)



第9号竖穴建物跡 完掘状況 (南より)



第10号竖穴建物跡 遺物出土状況 (南より)



第11号竖穴建物跡 完掘状況 (西より)



第12号竖穴建物跡 完掘状況 (北より)



第12号竪穴建物跡 完掘状況（北より）



第12号竪穴建物跡 遺物出土状況（西より）



第1号竪穴建物跡 遺物出土状況（南より）



第1号竪穴建物跡 完掘状況（南より）



第1号性格不明遺構 完掘状況（西より）



第1号性格不明遺構 遺物出土状況（西より）



第1号性格不明遺構 遺物出土状況（北より）



テストピット基本層序（西より）



第 2 号竖穴建物跡-1



第 2 号竖穴建物跡-2



第 2 号竖穴建物跡-4



第 2 号竖穴建物跡-3



第 2 号竖穴建物跡-5



第 2 号竖穴建物跡-6



第 3 号竖穴建物跡-1



第 3 号竖穴建物跡-2



第 2 号竖穴建物跡-7



第 3 号竖穴建物跡-3



第 3 号竖穴建物跡-4



第 3 号竖穴建物跡-5



第 3 号竖穴建物跡-6



第 3 号竖穴建物跡-7



第 3 号竖穴建物跡-8



第 3 号竖穴建物跡-9



第 3 号豎穴建物跡 - 10



第 3 号豎穴建物跡 - 11



第 3 号豎穴建物跡 - 12



第 3 号豎穴建物跡 - 13



第 3 号豎穴建物跡 - 14



第 3 号豎穴建物跡 - 15



第 3 号豎穴建物跡 - 16



第 4 号豎穴建物跡 - 2



第 4 号豎穴建物跡 - 1



第 3 号豎穴建物跡 - 17



第 4 号豎穴建物跡 - 3



第 4 号豎穴建物跡 - 4



第4号竖穴建物跡-5



第4号竖穴建物跡-6



第4号竖穴建物跡-7



第4号竖穴建物跡-8



第4号竖穴建物跡-9



第4号竖穴建物跡-10



第4号竖穴建物跡-12



第4号竖穴建物跡-14



第4号竖穴建物跡-11



第4号竖穴建物跡-13



第4号竖穴建物跡-15



第4号竖穴建物跡-16



第4号竖穴建物跡-17



第 4 号竖穴建物跡 - 18



第 4 号竖穴建物跡 - 24A



第 4 号竖穴建物跡 - 19



第 4 号竖穴建物跡 - 24B



第 4 号竖穴建物跡 - 20



第 4 号竖穴建物跡 - 21



第 4 号竖穴建物跡 - 22



第 4 号竖穴建物跡 - 23



第 4 号竖穴建物跡 - 26



第 4 号竖穴建物跡 - 25



第 4 号竖穴建物跡 - 27



第 4 号竖穴建物跡 - 29



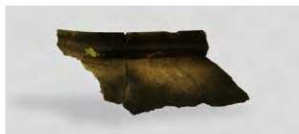
第 4 号竖穴建物跡 - 30



第 4 号竖穴建物跡 - 28



第 4 号竖穴建物跡 - 31



第 4 号竖穴建物跡 - 33



第 4 号竖穴建物跡 - 32



第 4 号竖穴建物跡 - 34



第 4 号竖穴建物跡 - 35



第 4 号竖穴建物跡 - 36



第 4 号竖穴建物跡 - 37



第 4 号竖穴建物跡 - 38



第 4 号竖穴建物跡 - 39



第 4 号竖穴建物跡 - 40



第 4 号竖穴建物跡 - 42



第 4 号竖穴建物跡 - 41



第 4 号竖穴建物跡 - 43



第 4 号竖穴建物跡 - 44



第 4 号竖穴建物跡 - 45



第 4 号竖穴建物跡 - 46



第 4 号竖穴建物跡 - 47



第 4 号竖穴建物跡 - 48



第 4 号竖穴建物跡 - 51



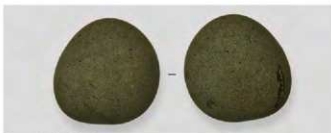
第 4 号竖穴建物跡 - 49



第 4 号竖穴建物跡 - 50A



第 4 号竖穴建物跡 - 52



第 4 号竖穴建物跡 - 55



第 4 号竖穴建物跡 - 53

第 4 号竖穴建物跡 - 54



第 4 号竖穴建物跡 - 56



第 4 号竖穴建物跡 - 57



第 5 号竖穴建物跡 - 1



第 5 号竖穴建物跡 - 2



第 5 号竖穴建物跡 - 3



第 5 号竖穴建物跡 - 4



第 5 号竖穴建物跡 - 5



第 6 号竖穴建物跡 - 1



第 6 号竖穴建物跡 - 2



第 6 号竖穴建物跡 - 3



第 6 号竖穴建物跡 - 4



第 6 号竖穴建物跡 - 5



第 6 号竖穴建物跡 - 6



第 6 号竖穴建物跡 - 7



第 6 号竖穴建物跡 - 8



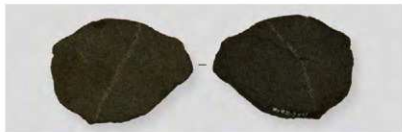
第 7 号竖穴建物跡 - 1



第 7 号竖穴建物跡 - 2



第 8 号竖穴建物跡 - 1



第 7 号竖穴建物跡 - 3



第 8 号竖穴建物跡 - 2



第 8 号竖穴建物跡 - 3



第 8 号竖穴建物跡 - 5



第 8 号竖穴建物跡 - 4



第 8 号竖穴建物跡 - 6



第 8 号竖穴建物跡 - 7



第 8 号竖穴建物跡- 8



第 9 号竖穴建物跡- 1



第 9 号竖穴建物跡- 2



第 9 号竖穴建物跡- 3



第 9 号竖穴建物跡- 4



第 9 号竖穴建物跡- 5



第 9 号竖穴建物跡- 6



第 9 号竖穴建物跡- 7



第 9 号竖穴建物跡- 8



第 9 号竖穴建物跡- 9



第 10 号竖穴建物跡- 1



第 10 号竖穴建物跡- 2



第 9 号竖穴建物跡- 10



第 10 号竖穴建物跡- 3



第 10 号竖穴建物跡- 4



第 10 号竖穴建物跡 - 5



第 10 号竖穴建物跡 - 6



第 10 号竖穴建物跡 - 7



第 10 号竖穴建物跡 - 8



第 10 号竖穴建物跡 - 9



第 10 号竖穴建物跡 - 10



第 10 号竖穴建物跡 - 11



第 10 号竖穴建物跡 - 12



第 10 号竖穴建物跡 - 13



第 10 号竖穴建物跡 - 14



第 10 号竖穴建物跡 - 15



第 10 号竖穴建物跡 - 16



第 10 号竖穴建物跡 - 17



第 10 号竖穴建物跡 - 18



第 11 号竖穴建物跡-1



第 11 号竖穴建物跡-2



第 12 号竖穴建物跡-1



第 12 号竖穴建物跡-3



第 12 号竖穴建物跡-5



第 12 号竖穴建物跡-2



第 12 号竖穴建物跡-4



第 12 号竖穴建物跡-6



第 12 号竖穴建物跡-7



第 12 号竖穴建物跡-8



第 12 号竖穴建物跡-9



第 12 号竖穴建物跡-10



第 12 号竖穴建物跡-11



第 12 号竖穴建物跡-12



第 12 号竖穴建物跡-13



第 12 号竖穴建物跡-15



第 12 号竖穴建物跡-14



第 12 号竖穴建物跡-16



第 1 号竖穴建物跡-1



第 1 号竖穴建物跡-2



第 1 号竖穴建物跡-3



第 1 号竖穴建物跡-4



第 1 号竖穴建物跡-5



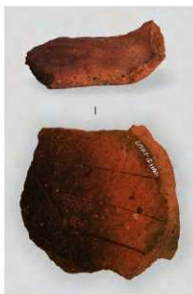
第 1 号竖穴建物跡-6



第 1 号竖穴建物跡-7



第 1 号竖穴建物跡-8



第 1 号竖穴建物跡-9



第 1 号竖穴建物跡-10



第 1 号竖穴建物跡-11



第 1 号竖穴建物跡-12



第 1 号竖穴建物跡-13



第1号性格不明遺構-1



第1号性格不明遺構-2



第1号性格不明遺構-3



第1号性格不明遺構-4



第1号性格不明遺構-5



第1号性格不明遺構-6



第1号性格不明遺構-7



第13号ピット-1



遺構外出土-1



遺構外出土-3



遺構外出土-4



遺構外出土-2



遺構外出土-5



遺構外出土-6



遺構外出土-7



遺構外出土-8



遺構外出土-9



遺構外出土-10



遺構外出土-11

報告書抄録

ふりがな	うちはらいせき								
書名	内原遺跡								
副書名	障害者支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告								
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第36集								
編著者名	吹野富美夫 杉原宗久								
編集機関	関東文化財振興会株式会社 〒308-0846 茨城県筑西市布川1012								
発行機関	常陸大宮市教育委員会 〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6								
発行年月日	令和3年(西暦2021年)12月20日								
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	高度	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
ウチハライセキ									
内原遺跡	茨城県常陸大宮市野口字内原1279番11ほか	08225	08080	36°55'3"	140°32'9"	20201102 ～ 20210123	1,479.0㎡	57.2 ～58.8m	障害者支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
内原遺跡	集落跡	弥生時代			弥生土器(甕)			古墳時代前期の竪穴建物跡で十王台式土器とS字状口縁台付甕が共存	
		古墳時代	竪穴建物跡 12棟 ピット 2基	土師器(坏・甕・埴・器台・高坏・甕・台付甕・甕)、土製品(紡錘車・管状土埴)、石器(磨石・礎石・砥石・石)、石製品(管玉)			9世紀に比定される竪穴建物跡から黒書土器が5点出土		
		平安時代	竪穴建物跡 1棟	土師器(坏・甕)、須恵器(坏・皿・甕)					
		中世	性格不明遺構 1基	土師質土器(内耳鉢)、瓦質土器(摺鉢・甕)、陶器(鉢・甕)					
		時期不明	土坑 1基 ピット 11基						
	包蔵地	旧石器時代			石器(刮片)				
		縄文時代			縄文土器(深鉢)、石器(打製石斧・石皿・部石)				
		弥生時代			弥生土器(甕)				
		中世以降							
要約	当遺跡は弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の複合遺跡である。古墳時代前期の竪穴建物跡1棟、平安時代の竪穴建物跡1棟が確認された。また、中世の性格不明遺構1基が確認されたが、段切状遺構の可能性が高い。遺物では、古墳時代前期の竪穴建物跡からS字状口縁台付甕が多数出土し、特に第4号竪穴建物跡では十王台式土器と共存している。								

仕様

【紙質】 本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用している。

表紙	レザック 66 白	215kg
見返し	上質紙	70.5kg
巻頭写真	マットコート	90kg
中扉・ごあいさつ・例言・目次・本文・付図	書籍用紙クリーム	70kg
写真図版・抄録・奥付	マットコート	90kg

【印刷】

写真図版以外はオフセット印刷（黒）

写真図版はオフセット印刷（カラー）

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 36 集

内原遺跡

障害者支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告

印刷 令和 3 年 12 月 15 日

発行 令和 3 年 12 月 20 日

発行 常陸大宮市教育委員会
〒 319-2292
茨城県常陸大宮市中富町 3135 番地の 6
TEL 0295-52-1111

編集 関東文化財振興会株式会社
〒 308-0846 茨城県筑西市布川 1012
TEL 0296-28-7737

印刷 極東印刷紙工株式会社
〒 308-0846
大分県大分市古国府三丁目 3 番 3 号
TEL 097-543-3131